

現代日本社会の若年女性の恋愛リスク

目次

1. はじめに	1
2. 現代における親密性の変容	7
2-1. 日本における恋愛	7
2-2. 現代日本の若者たちの恋愛観	9
2-3. 現代日本の若者たちの恋愛行動	11
3. 恋愛行動に伴うリスク意識	13
4. インタビュー調査の概要	15
4-1. 調査の概要	15
4-2. 調査項目	16
5. 現代日本社会の若年女性の恋愛リスク	17
5-1. 失敗すること	18
5-1-1. 容姿（見た目）	19
5-1-2. 自身の性格	20
5-1-3. 他人との比較	21
5-1-4. 相手の気持ち	22
5-1-5. 小括	22
5-2. 悪い影響	26
5-2-1. 時間への影響	26
5-2-2. 人間関係への影響	28
5-2-3. 気分への影響	31
5-2-4. 小括	31
5-3. 交際相手の条件	32
5-3-1. 依存できない相手	33
① 物理的近接	34
② 心理的近接	36
5-3-2. 性格が悪い相手	40
5-3-3. 自分のことを好きになってくれない相手	42
5-3-4. 価値観が異なる相手	44
5-3-5. 小括	44
5-4. 性に対する心配	46
5-4-1. 性に対する初印象	46
① マイナスイメージ	46
② 普通というイメージ	48
5-4-2. 性に対する心配	49
① 自信がない	49
② 妊娠と性感染症懸念	49
5-4-3. 小括	51
6. リスク意識に影響する要因	52
6-1. 年齢・交際経験とリスク意識との関係	52
6-2. 小括	54

7. おわりに.....	57
参考文献.....	59

1. はじめに

日本では、近年、晩婚・未婚化現象、またそれと連動して起こる少子化の傾向が問題視されている。「第16回出生動向基本調査」によると、戦前には約7割を占めていた「見合い結婚」がその後一貫して減少を続け、1960年代末には「恋愛結婚¹」が「見合い結婚²」を上回るようになった。そして2021年においては、見合い結婚は9.9%、恋愛結婚は74.6%となり、戦前と比べ、その割合は完全に逆転している（図1）。

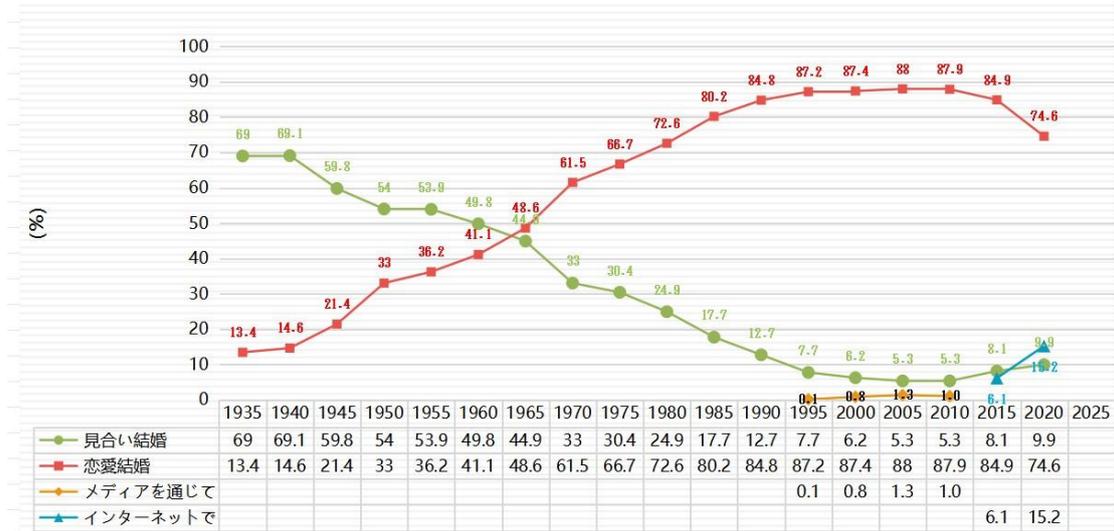


図1 結婚年次別にみた、恋愛結婚・見合い結婚の構成割合（2021年「第16回出生動向基本調査」より）

1990年代に山田（1994）が指摘したとおり、戦前の日本では、多くの人々が「見合い結婚」を通じて、恋愛を経ることなく結婚できたが、戦後では「恋愛結婚」が一般的になり、「デート文化が花開き、愛情の終着点である結婚相手を求めて、デートし、結婚したいという気持ちが高まればプロポーズし、恋人となり、経済的条件が許せば結婚する」というパターンが急速に普及したのであった。

しかし図1のように、「恋愛結婚」は2012年まで一貫して増加傾向であったが、2012年から減少し始め、特に2015年以降の減り幅は顕著である。これに関わり、1950年代から「見合い結婚」と「恋愛結婚」という2つのパターンが主であったが、最近では3つ目の新しい形式が生じている。それは「インターネットを介した出会いによる結婚」である。2021年に行なわれた「第16回出生動向基本調査」でも、アンケートには従来からある「見合い結婚」「恋愛結婚」に分類できるものに加えて、「インターネットで」という新たな選択肢が加えられた（図1）。これらの構成変化を結婚年別にみると、2015年以降に、「インターネットで」知り合った夫婦の割合が急増しており、2021年では「見合い結婚」を上回った（「インターネットで」は15.2%、「見合い結婚」は9.9%）。また、新たな出会いの機会が登場した一方で、従来型の「恋愛結婚」の割合が低下した。

では、この新しい出会いの形式を見てみよう。「ネットでの出会い」の代表例はマッチングアプリの利用である。マッチングアプリはインターネットを利用することで、

¹ 恋愛結婚：形式的な儀式に代わる実質性、自立性、デートと求愛（婚前の交際）、情緒的没入を特徴としている。

² 見合い結婚：社会的に隔離された青年男女を結婚を前提として相互に紹介し、結婚成立までの手続を双方の家長と協力して進める仲人が存在するものである。

性行動・恋愛・結婚の相手として相性の良い人物を探すソーシャルメディアである。スマートフォンから簡単に誰でも登録することができ、恋人を求める異性（同性）に効率的に出会うことができるというメリットがある。世界的に3億2千万人の利用者がいるという報告もある（Bandinelli and Gandini, 2022）。日本でもTinder、タップル、ペアーズなどのマッチングアプリがある（羽渕, 2022）。そのため、日本におけるマッチングアプリを利用する現状（特に青少年の利用する現状）についての研究も少ないながら存在する。

まず、青少年のマッチングアプリの利用率について、2017年に行った「第8回青少年の性行動全国調査報告」によれば、マッチングアプリの利用率は男子大学生が9.9%、女子大学生が7.1%であった（日本性教育協会, 2018）。この結果によると、大学生のマッチングアプリの利用率は低い。翌年に、原口・竹鼻（2019）は、マッチングアプリの大学生の利用実態と影響要因を探究するために、関東地方に住んでいる162名の大学生にアンケート調査を行った。結果として、アプリの認知度は89%で、興味を持つ者は28%、利用意欲を持つ者は19%、利用した経験がある者は15%であった。原口・竹鼻らの調査から見ると、大学生はアプリへの認知度が高いが、実際に利用した人が多くない。ここで、原口・竹鼻らの調査結果を前年の調査結果と比較すると、アプリの利用率が高いことがわかる。このような結果の違いについてはいくつかの理由が考えられる。例えば、一年で急激に利用する人が増加したのかもしれない。または関東地方のような都市の利用率が高いのかもしれない。また、羽渕（2022）は、2021年に日本全国の12歳から69歳の男女を対象とし、マッチングサービス・アプリを利用する状況についてランダムサンプリングによるアンケート調査を行った。結果として、利用しているのは20代で5.8%、30代で2.6%、40代で0.8%で、20代利用者の実数が約75万人程度であると推定されている（羽渕, 2022）。この結果から見れば、2017年と2018年の調査結果と比べ、青少年のマッチングアプリの利用率は逆に低い。これは、他の2つの調査が大学生に限定されるものであったり、サンプルの代表性に問題があるからではないだろうか。

マッチングアプリは交際相手を探すサービスであるが、実際にはそうではない。マッチングアプリを利用する目的について、2017年の青少年の性行動全国調査の結果から見れば、「付き合う相手が欲しい」という欲求が弱い。また、原口・竹鼻（2019）の調査によると、利用経験者のうち、42%がアプリで知り合った人と実際に面会しており、面会経験者の50%は面会者とセックスフレンドの関係を築いていた。つまり、マッチングアプリを利用する大学生の多くは、交際相手を探しているとは言えない。恋人ではないセックスフレンドの関係になっていた大学生が多い。

マッチングアプリの利用率に影響する要因について、羽渕（2022）は都市変数を作成し分析を行った。結果として、都市に在住する人のほうがマッチングアプリを利用しやすい。羽渕（2022）は「20代や30代の若者がマッチングアプリで知り合った人と交際していたり、結婚したりという事例が急速に増えているという評価は、若者が集まる都市の実感なのだろう」と述べている。つまり、マッチングアプリの利用率は地域の人口規模とつながっている。日本全国では平均的に利用されているのではなく、都市のほうが利用率が高い。

以上のように、現代の日本では、マッチングアプリのようなサービスの登場によって、新しい知り合いの機会が生まれていると言えるが、実際に利用する人が未だ多くない。大学生の利用率は10%未満である。また、交際相手を探すサービスであるが、大学生の利用者の多くは「交際相手を探す」ために利用するのではないようである。

そして、マッチングアプリの利用率は、地域の制約を受けている。つまり、今日の日本人にとっても、従来の「恋愛結婚」が一般的であることは依然変わっていない。

では、日本人の恋愛行動を確認して行こう。「第16回出生動向基本調査・独身者調査」(2022)によると、18歳から34歳の未婚者の半数以上(男性78.9%、女性72.2%)が交際相手を持たず、その割合は年々増加傾向にあることが明らかになっている。前で述べたように、現在の日本では恋愛結婚が一般的であり、恋愛しないと結婚も難しい。そのため、「恋愛しない若者たち」が日本の少子化現象を促進させている元凶であるとみなすようになった。なぜ若者が恋愛しないのか、そして「若者の恋愛離れ」を食い止めるにはどうすればいいのかなどが議論されている。このように若者の恋愛行動の停滞には、未婚化・晩婚化・少子化などの社会問題も関連してくることため、若者の恋愛行動への関心が高まってきた。「青少年の性行動全国調査」の第1回目の調査から第8回目の調査までの変化について概観してみると、大学生の主要な性行動(デート・キス・性交)の経験率は第1回目の調査(1987年)から第6回目の調査(2005年)にかけて断続的に上昇しているが、第7回目の調査(2011年)から下降に転じていた(図2、図3、図4)。

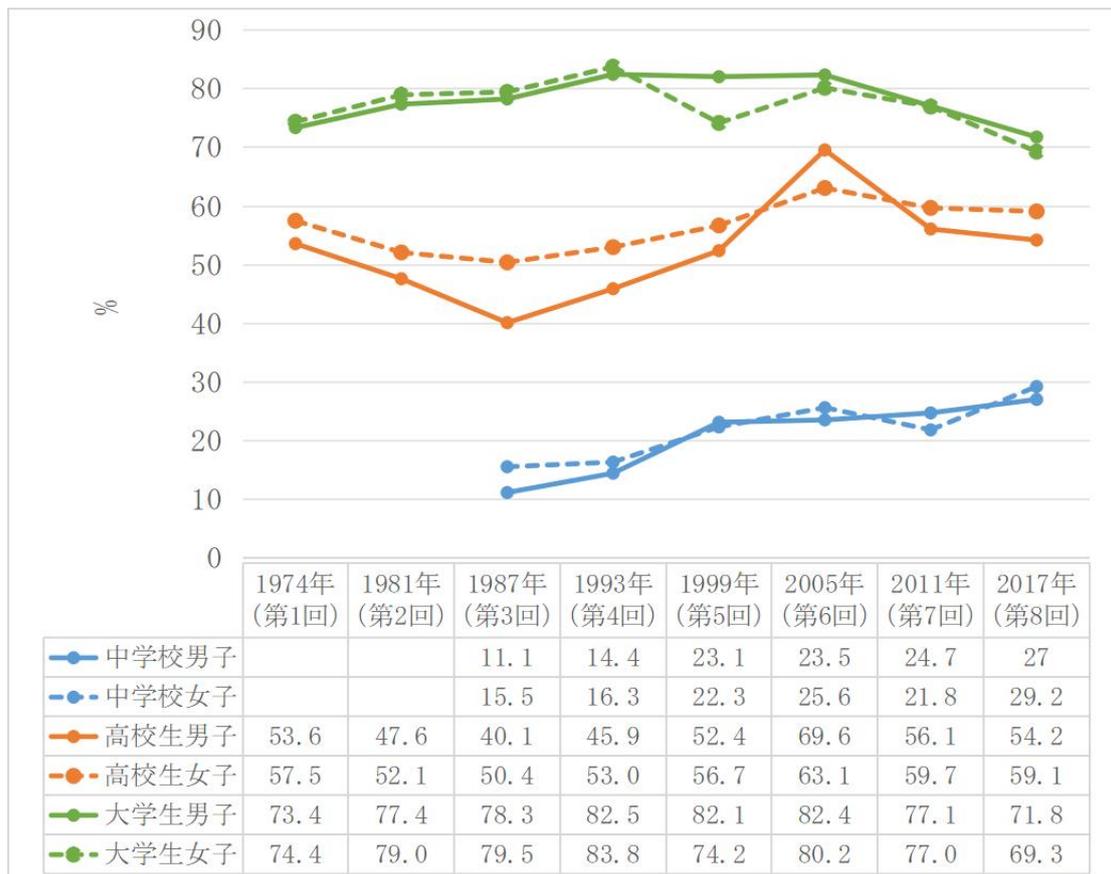


図2 性別学校段階別のデート経験率の変化(「第8回青少年の性行動全国調査」)

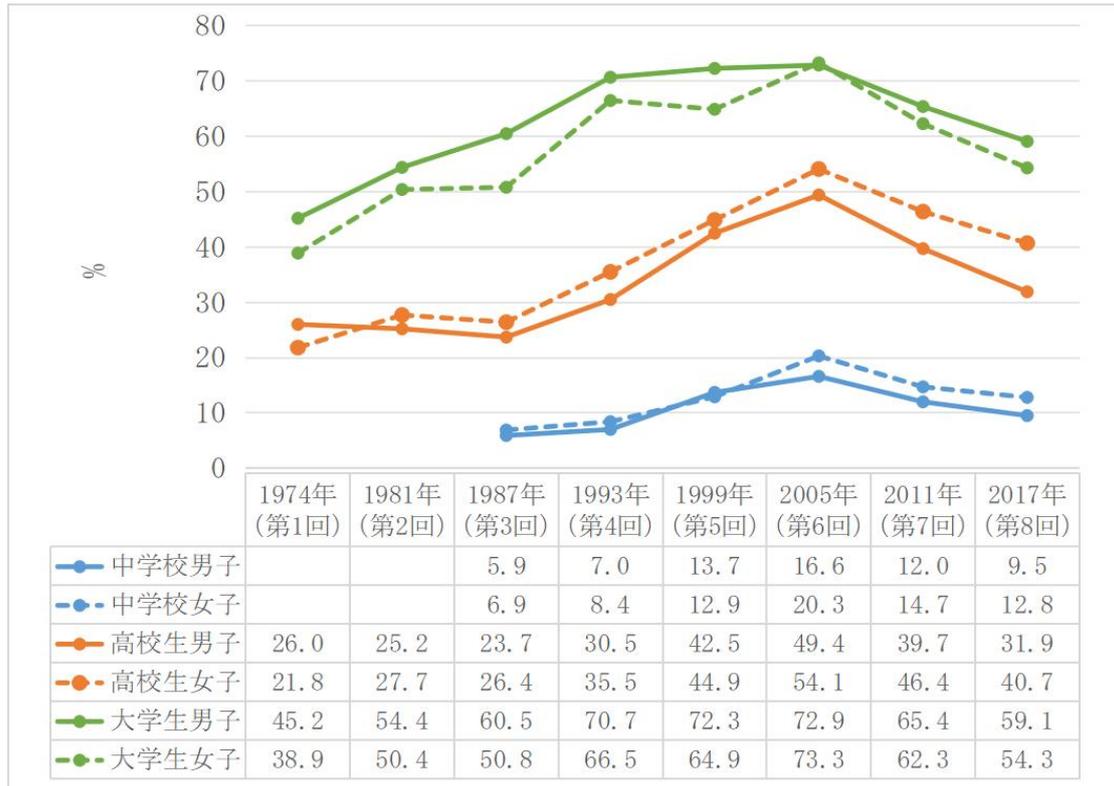


図3 性別学校段階別のキス経験率の変化（「第8回青少年の性行動全国調査」）

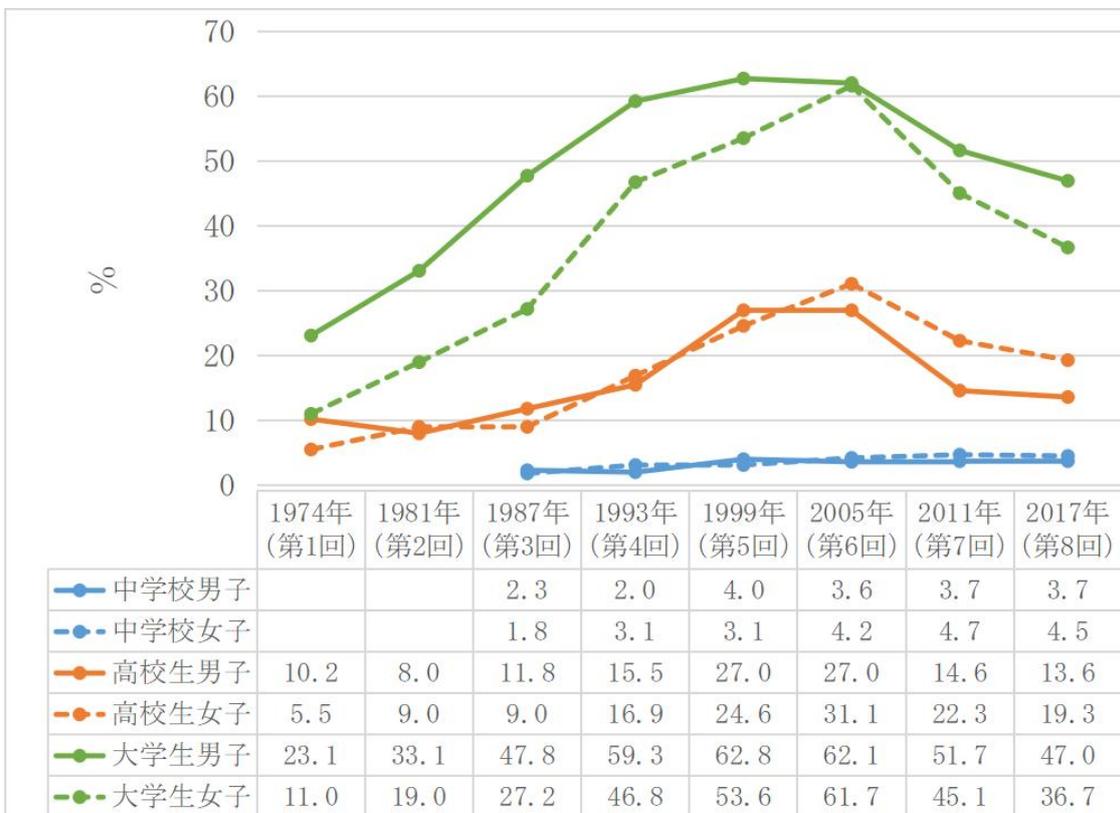


図4 性別学校段階別の性交経験率の変化（「第8回青少年の性行動全国調査」）

青少年の性行動の不活発化をめぐって、2007年頃から、「草食男子」（深澤, 2007）や「草食系男子」（森岡, 2008）といった言葉が登場した。2012年には「絶食化」などの言葉でも語られた（山田, 2012）。「草食系男子（草食男子）」という言葉は2008年から2009年にかけて流行語となった。新聞、テレビ、雑誌、インターネットなどでさかんに取り上げられ、人々の日常会話にもたびたび登場した。ライターの深澤真紀（2007）は『U35男子マーケティング図鑑』というウェブマガジンに、「草食男子」というタイトルのエッセイを發表している。深澤（2007）はそのエッセイで、「恋愛やセックスに「縁がない」わけではないのに「積極的」ではない、「肉」欲に淡々とした「草食男子」が若い世代に増えてきている」と指摘した。また、森岡（2009）は、「草食系男子」が男性の外見のことを指すのではなく、内面の心のことを指すのだということを強調している。「草食系男子とは、心が優しく、男らしさに縛られておらず、恋愛にガツガツせず、傷ついたり傷つけたりすることが苦手な男子のこと」である（森岡, 2009）。つまり、2005年から青少年の性の不活発化は、すでに社会的に注目された。

当初、「草食化」が話題になったのは男性でめぐる言説の中においてだった。しかし、「青少年の性行動全国調査」の2005年から2017年の調査結果によれば、性行動の不活発化は男子よりも女子で著しい。特に大学生では、デート経験・キス経験・性交経験のいずれにおいても、この間の経験率の低下は、男子よりも女子において顕著である。この点に関して渡辺（2010）は、大学生の意識調査を通じて、1999年から2009年にかけて「恋人がいる」学生の比率が特に女子で減少していること、またその理由が、女子の方が交際自体に無関心となっていることにあることを指摘した。また、「グループで付き合う異性や異性の親友はいるけれども、恋人は欲しいとは思わない」という学生を「草食系」と定義してみると、これに該当する者について、男子では15%である一方、女子では26%となり、「草食系」という意味では、男子より、むしろ女子の方が割合が多い。

そして今日の日本では、「草食系」という言葉は「草食系男子」だけを指すのではなく、「草食系」にあたる性や恋愛に消極的な若者たちは、性的な関係性が進まなく、恋愛に対する意欲がない人」といった意味にまでその範囲を広げている（土田, 2018）。

青少年の性行動の不活発化、すなわち若者層の「草食化」を引き起こす原因について、研究者たちは、さまざまな側面から探究した。その一つはリスク意識である。まず、リスクについて、小松（2003）は「リスク」を自己選択に伴う「未来の損害可能性」にかかわるものと定義した。これに基づいて、高橋（2010）は性行動の「リスク仮説」を提示した。21世紀に入って性行動の不活発化が生じた背景には、若者の性が「欲望の時代からリスクの時代」へ向かったことがある（高橋, 2010）。21世紀初頭の若者の言表の特質は、誰かと交際することが、「楽しみやチャンスとしてではなく、リスクやコストとして立ち現れているという点」にあるという（高橋, 2013）。片瀬（2016）によれば、現代の若者がより敏感になりつつあるのは、自己の選択がもたらすポジティブな結果ではなく、そこで生じるネガティブな結果である。つまり、現代の若者は恋愛から何を得られるかより、恋愛で何を失うかを重視するようになっている。これが「リスク化」と呼ばれる現象である。このリスク意識は性行動の不活発化を引き起こす原因の一つと見られる。リスク意識を性行動の不活発化を引き起こす原因の一つと見れば、性行動の不活発化が著しい若年女性にとってこの「リスク」とは何だろうか。

本論では、日本の若年女性の恋愛行動の不活発化に注目し、女子大学生の恋愛や性に対する考え方を分析する。恋愛行動に伴うリスク意識から若年女性の恋愛リスクを検討し、現代日本社会において、若年女性の恋愛に対する意欲が低下する原因を明らかにしたい。

2. 現代における親密性の変容

若年女性の恋愛リスクを探究する前に、恋愛に関する議論を確認することが不可欠である。この部分では、若者に限らず、全体的な恋愛に関する社会状況の変遷をまとめる。具体的には、日本における恋愛の変遷、現代日本人の恋愛観と恋愛行動に関する先行研究をまとめる。

2-1. 日本における恋愛

日本において、「恋愛」という言葉は、英語の love の翻訳語として、明治期につくられた造語である（柳父, 1982）。では、明治以前に love という感情が存在していなかったか。菅野（2001）によれば、現在「恋愛」と称する感情は、明治以前には「色」、「情」、「恋」、「愛」などと呼んできた。つまり、「恋愛」という言葉は明治以前に存在していなかったが、love の要素が存在していた。では、明治以前の「色」や「恋」などの感情は「恋愛」とどの違いがあるのだろうか。まず、明治以前の日本の男女関係を概観してみよう。佐伯（1988）によれば、「色」の時代には、性の交わりが男女を神聖な一対として融合させるという神話的な感性が存在していた。男と女は、安心してあの世に望みを託して心中できた。つまり、明治以前の「色」や「恋」などの感情は、性欲だけでなく、生命を投げ売ってもいいという強い情動が生まれ、心中までも行われた。そのため、「恋愛」という概念の輸入以前の日本にも、真摯な男女の恋情は存在したことが確認できる。しかし、明治以前は見合い結婚の時代であり、男性が自由に知り合える相手は女郎だけであるため、女郎と感情を持てるしかない。また、その時代には、家の存続が優先され、恋心だけの結婚は認められなかった。そのため、心中のヒロインも主として女郎である。明治以降の知識人たちは、通常の女郎との交情は恋愛ではなく、遊郭で展開されたのは模擬恋愛であり、心中は例外的な事象なのだったと主張した（菅野, 2001）。そのため、明治以前の「色」や「恋」は「恋愛」という概念で捉えられなかった。その後、「文明開化」の思想がもたらした「個人」の「意識」や主体性を尊重する思考が盛んになる。そのため、性が「聖なるもの」という地位から失墜し、また個人の「自己」の意識の発達は、男女関係における祝祭性の喪失を招いた。明治以降の知識人たちは、色や恋を、精神性を欠いた、あるいは遊戯的な性愛として忌避した（菅野, 2001）。そして、「love」という観念に接した明治の知識人たちは、そこに日本の「恋」とは異なる「高尚な」匂いを感じたのである。そこで従来の日本の「色」や「恋」と区別するため、「恋愛」という言葉を発明した。つまり、「色」や「恋」は、明治以降の自由に異性を好きになり、結婚相手を自分で選べる「恋愛」と違い、女郎と男性の間に生まれる感情や関係性である。

次は、「恋愛」、「性愛」、「結婚」との関係性の変遷をまとめてみよう。近代以前に目を向けてみると、大越（2001）は「近代以前の社会では「恋愛」、「性愛」、「結婚」は分離したものであった」と論じている。それは、近代以前の結婚形式は見合い結婚であり、結婚を前提として男女を相互に紹介し、恋愛しないで結婚に至るため、恋愛・性交する相手は結婚した相手とは限らないことが多かった。つまり、実際の近代以前の「恋愛」（「色」や「恋」など）は、女郎と男性との感情であるため、その共通した特徴は、結婚という形式の外で行われていたということである。この時期には、恋心があっても自由に結婚できないため、恋愛によって結婚制度が脅かされ

ることはなかった。恋愛は社会秩序を乱さないものであったのである。一方で、紹介された結婚相手は社会階級には差が生まれないように考慮された。しかし、個人主義の重視や経済の成長とともに、近代以降、恋愛結婚が一般的になり、誰でも恋愛し、結婚することが可能になった。恋愛は「家族的秩序」や「階級的秩序」を脅かす危険物になってしまった（井上, 1973）。社会階級の差が存在する相手に恋愛感情を持ってしまえば階級的秩序を乱し、夫婦以外の人に恋愛感情を持てば家族的秩序を乱すことになる。さらに、恋愛は「罪であり、社会にとって望ましい結婚制度を崩壊させる危険性をもつ」と見なされる（谷本・渡邊, 2016）。安定的な社会のためには、恋愛を結婚に見合うものにする必要が出てくる。そこで社会は、自らの秩序維持のため、3つの戦略を用意した（山田, 1994）³。その一つが「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」と呼ばれるものである。ロマンティック・ラブ・イデオロギーとは、「愛と性と生殖と結婚を媒介とすることによって一体化されたもの」である（千田, 2011）。あるいは、「愛と性と生殖の三者に強固な結びつきを与え、その結びつきが結婚によって正当化される考え方のこと」などと説明される（中西, 2017）。元々結婚と対立する恋愛は、逆に結婚と強く結びつき、結婚相手としてふさわしい相手に抱く感情こそが「恋愛」なのだとして規定する。すると、ふさわしい相手との関係が正しい恋愛関係として社会的に認められることになる。ふさわしい相手とは、結婚のために恋愛関係を始める交際相手である。結婚相手としてふさわしくない相手との関係は、偽物の恋愛として排除されることもなる。山田（2007）によれば、このイデオロギーは20世紀の欧米で花開き、日本においても高度経済成長期以降に実体的に普及した。実際に1970年代の日本で、見合い結婚より恋愛結婚が多くなったことは広く知られている。

かつての日本社会は「皆婚規範」が非常に強い社会であった。それは、ロマンティック・ラブ・イデオロギーが人々を結婚へと導いたからである。しかし1990年代から、ロマンティック・ラブ・イデオロギーに揺らぎが生じるようになった。1990年代の山田昌弘の調査からみれば、18～21歳の男女のうち90%以上の人は異性の友人がいて、約60%は恋人ではないがデートをするような友人がいる。このように、「お互いに恋人と思わなくても、心を通わせたり、デートしてもよい」時代となったことが伺える（山田, 1992）。つまり、1990年代から、日本社会は恋愛に対する考え方が変わった。婚前性交を否定する純潔規範⁴が男女共に影響力を低下させ、純潔規範から「純粋な恋愛」⁵志向へと変容したと考えられる（石川, 2007）。また、1990年代以降は、携帯電話など、若者が自由に利用できるコミュニケーション・ツールが普及することで、家族による統制から離れたコミュニケーションが活性化され、性行動も活発化していった（片瀬, 2007）。同時に、「セックスフレンド」や「友達以上恋人未満」など、性と愛情、あるいは性と恋愛関係を切り離して捉える新しい言説が登場する（谷本, 2008）。これらの言説は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの「恋愛－性愛－結婚の三位一体」に反している。つまり、90年代以降の恋愛は、配偶者選択のための恋愛から、それ以外の恋愛へと、認識の枠組みが変化したといえる。1970年代ごろ

³ 一つは、恋愛と結婚を分離してしまう戦略である。例えば、結婚は結婚として維持しながら、花街で恋愛をしたり妾をかこったりすることを指す。現在では公然とこの戦略を用いることは社会的に認められにくくなったといえよう。二つ目は、恋愛を抑制する戦略である。例えば、宗教の力を用いて恋愛感情そのものを罪悪としてしまう方法が一つの例として挙げられるだろう。最後に、結婚と恋愛をむしろ結びつける戦略である。これこそがロマンティック・ラブ・イデオロギーである。

⁴ 純潔規範：少女の身体を結婚まで純潔な状態に保持するための規範が女子教育上で編み出された。この規範を「純潔」規範と呼ぶ。

⁵ 「純粋な恋愛」とは①恋愛に高い価値を見出し、②愛があれば性関係を結ぶのは当然と考えるが、③一度の恋愛相手はただ一人に限る、④その相手の社会的属性は問わない、という理念である。（石川, 2007）

までは、交際し、性行動を持つ関係は、すなわち結婚に結びつく関係であることを意味していたため、このような時代には、誰を「恋人」とし、どのような状態を「恋愛」とするかが明確であった。しかし、1980・90年代には、ロマンティック・ラブ・イデオロギーがその影響力を弱め、男女交際の機会が増加し、そして、結婚や性行動が恋愛と必ずしもイコールで結ばれなくなった。「誰を「恋人」とするかという点で主観的（間主観的）⁶な区別が必要になり、互いの「意思表示」による確認が重要になった」という（山田, 1991）。つまり、恋人ではなくても性交渉できるため、セックスフレンドと恋人を区別するために、恋愛の関係を明確的に表示することは必要であった。山田（2009）は現代の恋愛の性行動、その前提となる男女交際に関わる規範の中で、大きく変容したのは「恋愛は結婚に結びつく」という規範であると述べる。

そして谷本・渡邊（2016）は、「恋愛は結婚につながらなくてもいい」というイデオロギーが広まっていると考えた。ロマンティック・ラブ・イデオロギーにおいて、恋愛の正当性の判断は結婚によって行われていたのに対して、現在普及しているイデオロギーは、恋愛感情の有無によって結婚の正当性が判断されるということになる。谷本・渡邊（2016）はこのイデオロギーを「ロマンティック・マリッジ・イデオロギー」と名付けたのである。このように、日本における恋愛は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの影響力の弱化とともに変遷していったと言える。

2-2. 現代日本の若者たちの恋愛観

ここまで、戦後日本における恋愛に関わる社会状況を紹介した。1990年代以降、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの影響力を弱め、結婚や性行動が恋愛と必ずしも結ばれなくなったことが分かった。この紹介とは別に現代の若者に注目して、恋愛観や恋愛行動を把握しなければならない。ここからは現代日本の若者の恋愛観を掘り下げてみていきたい。

まず、恋愛と性行動との関係を見てみよう。総理府の意識調査からみれば、1970年代初期は異性との交際のあり方に関する意識の転換期にあった（総理府青少年対策本部, 1972）。また、日本性教育協会による「青少年の性行動全国調査」からみると、大学生の「キス経験率」と「性交経験率」は、1974年から大幅に上昇した。石川（2007）によれば、1970年代以降の若者たちは、恋愛相手とのセックスを当然視する。つまり、性行動は恋愛と繋がっているが、結婚との関連がない。恋愛感情があれば結婚しなくても性行動ができる。これは「三位一体」のロマンティック・ラブ・イデオロギーが弱まる側面である。その一方、現代の日本社会で、性行動を伴う恋愛関係はある規範が存在している。羽渕（2012）は「一対一対応の代替不可能な親密性、そして、そのかけがえのない愛情の証拠としての性交渉という認識が強固にあるということは、日本の近代的な親密性の規範を示している」と述べている。つまり、恋愛関係の中で、一対一は不可欠である。また、大森（2022）は現代の若者の恋愛観について、「脱制度化⁷したといわれる今日においても、排他性を守ろうとする意識に関する共通の語りが見られ、未だに親密性のあり方は、「付き合う」という契約関係を結ぶことによ

⁶ 「主観的」とは、「ものの見方・感じ方・考え方（理解・評価・判断）が、当事者個人の立場・感情・経験などに依拠・依存しているさま」という意味で用いられる表現である。要するに「その人がどう受け止めたか」ということ。

「間主観的」とは、二人以上の人間（人間でなくてもよいが）において同意が成り立っていることを指す。

⁷ 「脱制度化」とは、ギデンズのいう「脱埋め込み化」であり、ローカルからの自律と時空の拡大の運動である。

って、カップルとしての儀礼的行為が発生し、セクシュアルに排他的な関係性を要請している、いわば「制度化」⁸的な関係である」ということを確認している(大森, 2022)。つまり、現代日本の若者には「付き合う」という契約関係が存在しているため、カップル以外の他者との間に性行為が発生すると、その契約関係が破綻してしまうことになる。これは日本社会における親密性の規範と一致する。

そして、恋愛と結婚との関係を確認してみよう。西村(1992)による調査では、1980年代後半の若者の恋愛観には、「恋愛と結婚は別なもの」と考える比較的自由的な恋愛観がある一方で、「恋愛と結婚を結合させて考える」といった従来型の恋愛観も存続することが明らかになった。アメリカの恋愛の形態は、相手を理解し、自己実現を図る過程へと変化した。つまり、「恋愛」と「結婚」は必ずしも結びつかないものとなった。これに対し、日本の恋愛は「『近代』家族のオリの中に囲い込み、日本産業社会を下支えする家族形成を図る機能を担っている」として、アメリカの恋愛状況とは大きくことなるという見解が示された(西村, 1992)。また、M・ホワイト(1993)は、1980年代の日本とアメリカの若者の性行動を比較し、「日本の若者たちにとっては、安定した将来への切符を手に入れることが重要であり、親子関係や友人関係、集団への帰属感といった「永続的な」関係の広がりによって精神的な安定が得られるため、性的な魅力の中に安心感を求めることはない」と述べている。この意識は現在の日本でも存在している。2009年に発表した「第八回世界青少年意識調査」から見れば、日本と他の国の若者とを比較すると、結婚する理由について、「愛情を感じている相手と暮らせる」という理由が最も低く、「自分の子供と家族を持てる」や「親を安心させたり、周囲の期待に答えられたりする」との理由が一番多い。この結果は30年前のホワイトの知見と変わらない。つまり、日本の若者は、性的な関係を求め、自己実現を図るために恋愛関係を始め、結婚するのではない。彼らにとって、結婚に至るまで一番重要なのは情熱があるかどうかということではなく、安定が得られるかどうかということである。

しかし、恋愛感情がいらなくてもいいというわけではない。2000年代初頭の調査から、羽瀧(2006)は、現代の若者たちにとって、「ドラマティックな恋愛、そして結婚=幸せ」は理想的であり、「本当に好きな人と結婚することが幸せには不可欠である」という信仰があることを明らかにした(羽瀧, 2006)。つまり、恋愛感情があつてこそ、結婚は正当的なものという面の生起も2000年代に入って確認されていたといえる。これは前節で述べた現代日本で広まっている「ロマンティック・マリッジ・イデオロギー」と一致する社会意識である。また、大森(2014)は、若者にとって「恋愛」とは何かを考察した。大森(2014)によれば、男女には、「恋愛」に対する意味付けに差異があった。女性にとって「本当の恋愛」とは、結婚して永続的な関係を持つことができる相手との恋愛である。一方、男性にとっては、恋愛感情が伴っている交際関係はすべて恋愛とみなす傾向がある(大森, 2014)。つまり、男性ではなく女性にとって、恋愛が結婚と結びつく傾向があることを明らかにしたのだった。

以上のことから、現代日本の若者の恋愛観をまとめられる。まず、性は恋愛と繋がり、結婚と繋がっていない。結婚前の「付き合う」ことには性的関係が含まれ、またそこでは性的排他性を互いに遵守しなければいけないという意識があると考えられる。そして、恋愛は結婚とある意味で結びつく。それは、結婚を前提として交際を始めるということではなく、結婚には恋愛感情が不可欠なものだという考え方のことである。また、男性より女性は安定的、永続的な関係を求めるようになった。つまり、

⁸ 「制度化」とは、社会規範が制度にまで体系化され斉一化することである。

恋愛が結婚と結びつくという意識が強いと考えられる。

2-3. 現代日本の若者たちの恋愛行動

前節では、現代日本の若者たちの恋愛観を分析した。ここから、若者たちの実際の恋愛行動について検討していきたい。

現代日本の若者は、安定的、永続的な関係を求めるが、山田（2005）によると、現代の若者の恋人持続期間は確実に短くなっている。山田（2005）は、「セックスが若者たちの間で日常化すると、それ以上の目標が無くなってしまい、関係を維持する必要性が無くなった」と結論づけている。お見合い結婚の時代では、紹介された二人は結婚のために知り合い、基本的には生涯を共にするため、相手を変えることも少なかったが、現代の場合、若者の恋愛交際経験の累積交際相手数は、年齢が上がるにつれて増加している（羽渕, 2006）。つまり、お見合い結婚の時代と違い、結婚に至る前の交際相手は一人だけではなく、より自由な形で複数の交際を経験している場合もある。交際にあたって何か良くない状況が発生した場合は、交際相手を変えられる。たとえば、二人の性格が合わないことや、好きではなくなってしまうなどの理由で、恋愛関係を中止することができる。では、なぜ安定的、永続的な関係を求めるが、恋人の持続期間が短いかというと、交際相手を変えることは簡単になり、永続的な関係を求めるからこそ、今付き合っている相手のことを観察し、将来のことを予想し、正しい（であろう）相手ではないと分かれば恋愛関係を中止するのは一般的になり、間違った相手を排し、正しい相手（であろう）を探すことになるのかもしれない。

他方、現代の日本社会には「一対一対応の代替不可能」という親密規範があるが、羽渕の2002年に行った調査の結果によると、同時に複数の相手と恋愛交際をしたという経験者の若者は19.7%、自身を含め相手の側に複数の交際相手がいたという経験者は17.4%いる（羽渕, 2006）。谷本の2005年の調査でもこのことを確認できる。谷本（2008）によれば、大学生の中に複数の人に恋心を抱いたことがある大学生は全体の三分の一にもものぼった。これは前節で述べた若者の恋愛観と矛盾がある。この「複数の相手に恋心を抱く」現象をめぐる、谷本（2008）は雑誌の「人間関係における曖昧性、遊戯性」の記事内容に注目し、現代の恋愛言説を分析した。谷本（2008）はまず、理論的研究における恋愛の特徴をまとめた。理論的な恋愛は「他者を求め、アイデンティティを保証する関係」に収束する（谷本, 2008）。そして谷本（2008）は、実際の雑誌記事から現代の恋愛に対する言説の特徴を抽出した。具体的な内容として、「①友達以上恋人未満、②恋人ではない人とのセックス、③恋の気持ちがわからない、④他にもいい人がいる、⑤浮気、⑥さりげなさ・回りくどさ（恋愛相手に対する最も効果的なアプローチ方法は、好意をあからさまに伝えるのではなく、さりげなくにおわせるような間接的な行動だとされている）」が挙げられる（谷本, 2008）。これらの言説からみると、実際の雑誌記事における恋愛は、理論的研究の恋愛概念と一致せず、あたかも「ゲーム」の色彩を帯びている。谷本（2008）の分析結果として、現代における恋愛の言説は「理論的研究の恋愛概念では説明がつかない傾向」を有している。それは「人間関係を曖昧なままに保ち、そのような関係を楽しみ、「遊ぶ」という傾向」である（谷本, 2008）。実際の恋愛の言説は理論的な恋愛と違いがあれば、実際の恋愛行動は恋愛観と一致ではないことも理解できるかもしれない。日本における現代の若者は、一対一、永続的な恋愛関係を求めるが、実際の恋愛行動を進む際に、

関係を楽しみという傾向がある。

そして、実際の恋愛現場での恋愛行動を確認していきたい。大森（2022）は恋愛関係を成立させるために、なぜ、どのようなコミュニケーション方法をとる必要があるのかを明らかにすることを課題とし、恋愛関係の成立、つまり「付き合う」までの過程と「別れ」の局面で行われるコミュニケーションに焦点を当て、若者の恋愛行動を分析した。その結果、「恋愛」の始まりの段階には「告白」という儀礼的な行為があり、それを経て「付き合う」という契約関係が成立する。「付き合おう」という告白は、高い確率で相手の了承が得られるという確信を持ってこそ行えるのであり、むしろそうではない場合には自ら諦めるという形で撤退していく様子が伺えた。また、「付き合っている」関係を解消することは、契約関係を破綻させるような違反的な行為がない限り、そこに正当な理由が必要である（大森, 2022）。つまり、現代の若者たちは、「告白」という行為を通じて、恋愛関係を始めるため、「告白」という行為は恋愛にとってほぼ欠かせないものである。仮に、告白を経ずに親密な関係が成立していたとしても、「付き合っている」のか否かを確認する会話は必ず必要となり、それにより「付き合う」という契約的な了解が得られなければならない。また、他者との関係を構築していく段階で、告白の成功率を測り合っていることができる。例えばメールやメッセージなどの返信速度の情報を観測する。交際したい相手がいても、成功の自信がなければ告白もしない。そして、互いの合意がなければ「付き合っている」という明確な認識を持ちにくいと同様に、「別れ」の際にも互いの合意の必要性を感じているのであり、一人の意思だけで恋愛関係を始めること、また終わることができない。

以上のように、日本における現代若者の実際の恋愛行動は彼らの恋愛観と一致ではないことが確認できた。自由な形で複数の交際を経験でき、交際関係を中止することも簡単になり、恋人持続期間は短くなっている。また、必ず一対一な関係を維持するのではなく、実際の恋愛行動は「遊ぶ」という傾向がある。そして、恋愛の過程で、恋愛関係を始めるために「告白」という儀礼的な行為は不可欠であり、それを経ることで「付き合う」という契約関係が成立する。告白が成功できる自信がないため撤退していくことも少なくない。また、交際関係を中止する際にも、互いの合意が必要である。

3. 恋愛行動に伴うリスク意識

『岩波国語辞典』では、「危険」をこのように定義している。

危ないこと。①悪い事の起こる恐れがあること。↔安全。「～をおかす」「夜道は～だ」②予想される悪い事態。「～を未然に防ぐ」。

小松 (2003) は「リスク」を、自己選択に伴う「未来の損害可能性」に関わるものと定義した。そして高橋 (2010, 2013) は、21 世紀に入って性行動の不活発化が生じた背景には、若者の性が「欲望の時代からリスクの時代」へ向かったことがあるという。高橋 (2010) によれば、21 世紀初頭の若者の言表の特質は、誰かと交際することが、「楽しみやチャンスとしてではなく、リスクやコストとして立ち現れているという点」にあるという。こうしたリスク化の背後にあるのは、マスメディアの発展によって性をめぐる話題をネットで得ることが可能になったため、性についての友人とのコミュニケーションが減少したこと、すなわち性のプライベート化であるという。現代の若者は性のリスク管理を個人化させ、自己決定しなければならなくなったが、その結果「性の自己決定のパラドクスとしてのリスク化」が生じているというのである (高橋, 2013)。そして「青少年の性行動全国調査」の時系列データの分析を通じて、性行動のリスク化によって性行動が不活発化していることを明らかにし、性のイメージのうち「楽しくない」という回答をリスクの指標として⁹、異性関係別にリスク意識のスコアを平均すると、異性との接触が少ない者ほどリスク意識も高いことを指摘した。さらに、男女ともに、友人とのコミュニケーションが性のリスク意識にもっとも大きな負の影響を持っていることを明らかにした。ここから高橋 (2013) は、友人とのコミュニケーションはこれまで2つの経路で性のリスク意識を低下させてきたという。1つは、性をめぐる会話や相互干渉を通じ、共に性的関心を培養するという経路であり、もう1つは相互の情報交換をすることでリスクに対する扱い方を得ていくという経路である。こうした友人とのコミュニケーションが近年減少したことから、性の問題を自己決定せざるを得なくなるといった状況が生まれ、性行動のリスクは個人化し、そこで性行動の不活発化が生じているという。

上記のようなリスク論に立てば、片瀬 (2018) は「高橋 (2013) の指標化の段階で詰めを誤った可能性がみえてくる」という。片瀬 (2018) によれば、リスク概念は自己決定から生じる「未来の損害」であるが、高橋 (2013) が取り上げた指標の性イメージ「楽しいー楽しくない」は、「現在」の表象しかない。そのため、このリスク指標を考え直すことが必要であろう。第7回「青少年の性行動調査」に、性イメージについて尋ねた項目のすぐ後に、性交時の妊娠懸念と性感染症懸念に関する質問がある。これらの設問はいずれも、現在の性交が将来的に妊娠なり性感染症という損害を与える可能性について、どれほど知覚しているかを問うものである。片瀬 (2016) は、妊娠懸念も性感染症懸念も、若者の性行動を抑制する要因になると予想する。また、「中絶を選ぶにせよ、出産を選択するにせよ、未婚の大学生にとって、男性より女性のライフコースに大きな影響を持つ」と考えた (片瀬, 2016)。実際、妊娠すること、または妊娠させることは、未婚または学業中の青少年にとっては、学業の中断もしくは中止や、中絶による心身の損傷をもたらす。また性感染症に感染することは、場合によって生命を危険にさらすことにもなりかねない。片瀬 (2018) は、これらの項目が「未来の損害可能性」というリスクとしての性行動の側面を捉えていると考えた。「青

⁹ 具体的には4段階で尋ねる性イメージに「楽しい=1」～「楽しくない=4」としたうえで、この性リスク意識スコアの平均値を学校段階・男女別に異性関係別に集計している。

少年の性行動調査」の第7回目調査と第8回目調査の結果を比較すると、妊娠に関して、第7回目調査では男女とも6割前後が「非常に気になる」と答え、「多少気になる」と合わせると9割を超える者が妊娠懸念を持っていた。さらに第8回目調査になると「非常に気になる」という者は、男子では8ポイント程度、女子では21ポイント近く増加しており、この間に男女とも（特に女子において）妊娠懸念を持つ者が増加している。同様に性感染症懸念についても、「非常に気になる」、「多少気になる」という者は、男子では8ポイントほどに増えて69%になり、また女子では18ポイント大幅に増加して78%となり、性行動の「リスク化」が進んでいることがわかる。片瀬（2016）によれば、女子は、性感染症懸念が強いほど性交経験率が低下する。特に性感染症懸念がこの6年間で高まっていることを考えると、このことが性行動の不活発化に関わっている可能性も示唆される。また、妊娠懸念のみが、男子より女子において性行動の不活発さをもたらしていた。

しかし、今日では、リスクは「自己決定から生じる未来の損害」だけで定義しなく、新たな意味が生じた。市野澤ほか（2015）は、リスクをより詳しく、次のように定義する。

リスクとは、(1) 未来、(2) 不利益（損害）、(3) 不確実性、(4) コントロール（操作・制御）、(5) 意思決定、(6) 責任という6つの要因すべてを内包する、現在における認識である（ここで言う「認識」には、態度や行為といった事柄が外延的に含まれる）。

そのため、恋愛行動に伴うリスクも再考することができる。前節で述べたように、「恋愛」の始まりの段階に「告白」という儀礼的な行為があり、それを経て「付き合う」という契約関係が存在する。大森（2022）によると、「告白は、高い確率で了承が得られるという確信をもってこそ行えるのであり、むしろそうではない場合には自ら諦めるという形で撤退していく様子」が伺えるという。つまり、交際の最初の段階、いわゆる告白の段階には「告白が失敗するかもしれない」というリスクが存在している。それはリスクの「不確実性」の要因と言える。また、日本の若者、特に女性において、関係の永続性を希求することが確認された。そのため、交際を始める前、また現在の交際を続けるべきかどうかを判断する際に、「交際する」、「交際を続ける」、「他に乗り換える」などのたくさん選択肢がある。ここでも「選択し間違ふ」というリスクがある。つまり、自身が決断や選択をする主体になる時、同時にその結果に対するリスクや責任を担うことになる。市野澤（2015）のリスク定義からみれば、これは「意思決定」、「責任」、「不確実性」の要因といえる。このように、恋愛行動に伴うリスク意識は片瀬（2018）が主張した性行動の側面で存在するのだけではなく、恋愛の他の段階にもリスク意識が存在していると言えるのだろう。本研究では、性に対するリスクを検討すると同時に、恋愛の他の段階の、若年女性の恋愛リスクについての検討を試みる。

4. インタビュー調査の概要

4-1. 調査の概要

本論では、弘前大学の女子大学生9名に対して半構造化インタビュー調査を実施した。インタビュー調査を実施する前に、身近な同大学の女子大学生の数名に簡単な聞き取り調査を行ったところ、恋愛、特に性についてのプライベートな話題は、親しい友人などには話しづらいという傾向が分かったため、対象者は、筆者とは全く面識のない人物を知人から紹介してもらうことにした。インタビューは全て対面で行い、調査データについては、調査対象者から録音許可を取ることができた場合に限り、その音声データも取得した。その後インタビューの内容を繰り返し聴いて、文字起こしの作業を行った。インタビューは、恋愛の経験、恋愛や性に対する考え方、恋愛への心配や不安についての以下に示す質問項目を踏まえた上で、恋愛に関するライフストーリー全体に着目した。

先行研究でも触れたように、「青少年の性行動全国調査」では、若者の主要な性行動（デート・キス・性交）の経験率が第1987年から2005年にかけて断続的に上昇しているが、2011年からは下降に転じていた。中でも特に顕著なのは、大学生女子の性交経験率の変化である。大学生男子に比べ、大学生女子の性交経験率の減少が特に著しい。つまり、前節で述べた「性や恋愛に消極的、性的な関係性が進まなく、恋愛に対する意欲がない」（土田, 2018）といったような、いわゆる「草食系」に該当する者は、男子より、女子が多い。その実態を明らかにするため、今回の調査の対象者（表1参照）は、女子大学生であることを条件とした。また、交際相手、恋愛・性交経験の有無によって、それぞれが抱える、リスクも違う可能性があるため、対象者を選ぶ際に、パートナーの有無、恋愛や性の経験の有無は特に限定していない。調査項目（表2）においては、恋愛の段階によって、不安や心配なことも異なる可能性があるため、インタビューを行った際にその聞き分けを行った（表2-7）。具体的には、交際前（好きな人がいる、告白されているなどの状態）、交際中（恋人がいる状態）、交際後（別れた後の状態）、非恋愛（何もない状態）の4つに分けて聞き取りを行った。

表1. インフォーマント一覧 ※対象者はすべて仮名

対象者	交際経験の有無	今交際している対象の有無	交際した人数	年齢
伊藤さん	ある	いる	6人	20
小林さん	ある	いる	5人	20
佐藤さん	ある	いる	3人	22
山本さん	ある	いる	3人	21
中村さん	ある	いる	2人	19
高橋さん	ある	いる	1人	21
渡辺さん	ある	いない	3人	23
田中さん	ない	いない	0人	21
鈴木さん	ない	いない	0人	21

4-2. 調査項目

表 2. 調査項目

1	現在の交際相手の有無
2	現在までの交際経験の有無
3	それぞれの交際の期間
4	過去の交際人数
5	交際する・しない理由
6	恋愛への考え方
7	恋愛に関する心配・不安なこと（交際前・交際中・交際後・非恋愛）
8	心配・不安が生じる原因
9	交際する際に重要なこと
10	交際した前後の変化（生活や友人関係、家族関係など）
11	性交経験の有無
12	性に対するイメージ
13	妊娠や性感染症への懸念
14	出身
15	年齢
16	学年
17	学部
18	居住形態（実家？一人暮らし？）
19	交際相手の年齢
20	交際相手の職業
21	趣味

5. 現代日本社会の若年女性の恋愛リスク

なぜ恋愛するのか、恋愛することは自分に何か影響があるのかを聞いて、恋愛の利点について語った対象者が何人がいた。まず、気分を上げることである。渡辺さんと中村さん二人は、恋愛経験があった。前の経験からみれば、恋愛すると気分がよくなっているようであった。

筆者：恋愛することは、自分の生活に何か影響がありますか？

渡辺：影響っていうか分からないんですけど、毎日楽しくなりましたし。

筆者：小学校の時は、恋人が作る前後、自分に影響とかがありますか？

中村：生活は特にないんですけど、自分の気持ちは常にワクワクしちゃうやってましたね（笑）。小学生ですね。

また、山本さんは恋人が支えをもらえることを言及した。体に不安がある山本さんは、恋人から助けをもらって、安心になってきた。山本さんは自分が特別視られたと言ったが、山本さんの語りから見ると、彼氏を同じように友達でも家族でもなく、特別な存在を視した。

筆者：今の恋愛は自分の生活に何か影響がありますか？

山本：悪い影響が全然ない。私はいま、結構、女の体の事情で、すごい不安定な感じ、いま薬が飲んでいるんです。副作用があり、そこに彼が支えてくれたのです。助けをくれたりとか、逆にこう、支えてくれたの感じで、本当にありがたいです。いてくれてありがとうみたいな感じで。友達とも家族とも言えないですが、特別視してくれたんです。確かいまも特別視しているんですけど、こうなんか、自分と離れた、より自分に近い存在として、一番頼れる感じなので、そうですね、安心感があります。一番の影響が安心させてくれるということですね。

恋愛することは精神に利点があるだけでなく、生活にも利点がある。佐藤さんは恋人ができてから生活リズムも変わった。相手のことを考えなければならぬため、食生活や日常生活は健康的になった。

筆者：恋人ができる前と後で生活に何か変化がありますか？

佐藤：自分のこう気持ちとかじゃなくて、普通に生活リズムとかですか？

筆者：気持ちでも、生活のリズムでもなんでも大丈夫ですよ。

佐藤：・・・生活は一人のときは結構あのダラダラやってたんですけど、彼氏もいるので、ちゃんと自炊の改正を行ったりとか、部屋きれいに保つようにするとか、そういうのが変わったかなと思いますね。

このように、恋愛することはいいことこのような恋愛の利点はあるものの、リスクについても語られた。対象者たちの恋愛と性に対する考え方、心配や不安なことは以

下のおりに「失敗すること」、「悪い影響」「交際相手の条件」、「性に対する心配」に分類することができた。

5-1. 失敗すること

まず、現在交際している人については、それ以前の恋人がいない期間について、また、現在交際していない人には、なぜ恋人を作らないかについて質問した。その結果、「自信がない」と回答する人が一番多かった。表3のように、9人中6人が「自信がない」、9人中3人は「必要がない」、残りの一人は「余裕がない」と答えた。「必要がない」と「余裕がない」の回答については後で分析を行うが、ここでは「自信がない」という回答を分析してみよう。

表3. 恋人を作らない/作らなかった理由

対象者	自信がない	必要がない	余裕がない	交際経験の有無	年齢
伊藤さん	○			○	20
小林さん	○		○	○	20
山本さん	○		○	○	21
高橋さん	○			○	21
田中さん	○	○			21
鈴木さん	○				21
佐藤さん				○	22
中村さん		○		○	19
渡辺さん		○		○	23

では「自信がない」ことは、これまで見てきたリスク意識とどんな関連があるのだろうか。まず先行研究から、リスクは自己選択に伴う「未来の損害可能性」に関わることが分かった。「自信がない」ことは、良い恋愛関係を持てる自信が無いということでもある。「未来の損害可能性」から考えれば、恋愛が失敗すれば自分に悪い影響があるかもしれないと考えるため、彼女たちは、上手にいく自信がなければ恋愛を始めない方がいいと考えている。つまり、彼女たちは「失敗する」ことを心配している。ここでは、「自信がない」という理由で恋人を作らなかった、また作っていない対象者の語りを分析しながら、彼女たちの失敗への恐れについて探究していきたい。また、具体的にどのところに自信がないについて、対象者たちの語りを分析した上で、「見た目」、「自身の性格」、「他人との比較」、「相手の気持ち」の4つを分けた。

5-1-1. 容姿（見た目）

「自信がない」と語る人は、まず自分の見た目に自信がないと言った。小林さんが初めて付き合ったのは高校の時であった。中学生時代の恋愛への興味について聞くと、恋愛に興味はあり、好きな人もいたが、その時はちょっと太っていて、自信が無かったため恋人を作らなかったという。

筆者：中学校の時は、恋人ができなかったですか？なんか興味が無かったですか？その時。

小林：いや。好きな人とかいたんですけど、すごい自信がなくて、そうですね。今もちょっと太ってるっていうか、ぷくぷくなんですけど、当時はもっとぷくぷくで、その時に、体が、なんかそれで自信ないなあとと思って、ダイエットしたりして、自信を手に入れて（笑）、興味自体はありましたね、多分。

山本さんは今大学四年生で、恋人がいる。初めて付き合ったのは大学1年生の時であった。中高の時に恋人ができなかった理由を聞くと、見た目に非常に自信が無かったと語っている。

筆者：・・・なぜ中学校や高校の時恋人を作らなかったんですか？

山本：そうですね。好きになる人はいたんですけど、どうしても言い出せないっていうか。その時の自分にはすごい自信がなかった…見た目とか自信がなくて・・・

伊藤さんは今まで恋人を何人か作っている。交際することに対する自信には問題は無かったが、関係が深まるにつれて、それに伴う性行動で、自信が無くなっていく様子を語った。

筆者：・・・性に対する何か心配がありますか？

伊藤：ああ、そうですね。自分の、なんか、体型とか、すごいスタイルが悪いっていうか、あんまり自信がないので、コンプレックスっていうか、はありますね。

筆者：そうですか。付き合うと、性に対する自信がなくなるんですね。

伊藤：はい。

恋人を探す時、相手の外形を重視することは想像できる。そのため、逆に自分の外形に自信がなかったら、「こういう私は誰でも好きではないだろう」というような考えも存在するかもしれない。見た目に自信がない彼女たちは、自分を変えることで自信を手に入れて、恋愛を試みる。つまり、準備ができていなければ、恋愛もしない

5-1-2. 自身の性格

見た目以外に、自分のことについてもう一つ不安があるのは自身の性格である。高橋さんは大学に入ってから初めて恋人ができた。大学入学以前にも好きな人がいたが、実際の行動は何も起こしていなかった。その理由はクラスの中で暗い方だったため、人と付き合うことはできないと感じていたからである。

筆者：・・・好きな人がいましたか？

高橋：好きな人はちょいちょいは、まあいましたけど。実際行動は何もしてないって感じですね。はい。

筆者：でその時、付き合わなかった理由は何ですか？

高橋：何だろうな。クラスの中ではわりと暗い方だったので、人と付き合うっていう感じでもないかな、みたいなイメージなんだろうなというか・・・

田中さんの場合は、他人の恋愛経験を聞いたことによって、人と付き合うことに自信がなくなった。その具体的な内容は、恋愛当初の情熱が時間の経過に伴い失われてしまったというものである。最初は好きで付き合ったのだが、時間が経つに伴い、交際関係の継続をあきらめてしまった人や、その関係に慣れてしまった人が多い。大学で告白されたことがあったが、いわゆる「蛙化現象」によって、その告白を断ってしまった。蛙化現象とは、「ある男性に対し自分が一方的に好意を持っていると女性が理解している状況で、実はその男性も自分に対し好意を持っていることが女性にとって明らかになると、それがきっかけとなって、女性はその男性に対して生理的な嫌悪感を持つようになる現象」である（藤澤, 2004）。

筆者：・・・将来のことについて何か心配や不安がありますか？

田中：なんだろう、付き合いだてとかはやっぱ好きだから付き合ってるけど、時間たったらどうしても飽きちゃうっていうか、こう慣れっていうか、あるみたいなお話をよく聞くので、その上で自分に自信ないのに、一緒にいてくれるのかな、みたいなお話、ちょっと気になるな（笑）。

筆者：自分に自信がないけど、告白されれば恋愛しますか？

田中：（笑）告白があるっちゃあるけど、その、大学で告白されたんですよ。なんですけど、あのなんか「蛙化現象」って聞いたことがあります？それみたいになっちゃって、あ、この人（私のこと）好きなんだ、「わー」みたいになっちゃって、一緒に遊んでみたんですけど、いやダメだ、これはダメだ、ごめんっていったっていうことで、うん。

田中さんも今まで交際経験は無かった人である。田中さんも、付き合わない理由は自分に自信がないことである。

筆者：・・・中学校や高校の時もしたくないですか？
田中：中高は特になかったですね。
筆者：それはなぜですか？
田中：うーん、自分に自信がなかったの、なんかできるものだと思ってなかったの。
筆者：具体的にどちらに自信がないんですか？
田中：性格とか？友達で楽しいし、彼氏ができたら楽しいなのかわからないです。

高橋さんと田中さんは、恋人を作らない理由として「自身の性格」を挙げている。自身の性格がよくなく、また「蛙化現象」などがあり、恋愛を始めても良い恋愛関係を継続する自信が持てずに、恋人を作ることを躊躇してしまう。

5-1-3. 他人との比較

自分のことに自信がないだけでなく、恋愛関係を始める前に、他人と比較し、自分は他の人より魅力が足りないと思うため、告白をされたとしても本当に自分のことが好きかどうか、また他の人と付き合った方がいいのではないかと思ってしまい、恋人を作らない人もいます。

鈴木さんはいままで恋人ができたことが無かった。その理由は他人と比較すると自分の価値が低いと思う。そのため、これまで告白された経験はあったが、その真実性を疑い、交際に踏み切れなかった。鈴木さんは好きな人がいたこともあったが、友達からいろいろなアドバイスをもらっても、恥ずかしくなり、最後は諦めてしまったという。

鈴木：・・・あとなんか私よりもその可愛い子がいるから、そっちと付き合った方がいいんじゃないかみたいな、そうですね、自己の価値が低いので（笑）。
筆者：・・・告白されたことがありますか？
鈴木：あります。なんか、すぐに「はい」って言う全然。一体どこを好きになったでしょう。志望理由をお聞かせください。本当だったら付き合うかもしれない。
（中略）
筆者：友達から恋人を紹介されたことがありますか？
鈴木：それはなくて、「好きな人いないの」と言われた時に、「いる」って言ったら、もっと仲良くなるためのアドバイスがすごい来て、例えば、今LINEして、「ご飯誘え」とか、「こういう口実で誘ったら」とか、「あそこにいるから話しかけてみたら」とか、すごい言われて、毎回、あの恥ずかしいってなっています。

山本さんは付き合っていた同年代の女子は美女というイメージが非常に強かったため、自分の魅力では恋愛ができないと思っていた。勇気を出して告白してみたが、断られることが多かった。

山本：・・・やっぱり付き合っている方々には美女だったりっていうイメージが、その当時にすごい強かったんで、なんか気が引けてたんのと、あとは多分魅力が足りなかったんだと思います。
筆者：なるほど、自分自身の問題ですね。
山本：そうですね。自信もなかった。我慢して言うてはみるんですけど、ごめんなさいって言われることが多くて（笑）。

鈴木さんと山本さんの場合は、周りの人を観察し、自分よりよい選択があるため、なぜ自分のことを好きなのかを疑い、いろいろなことを考え、簡単に恋愛を始めることができない。

5-1-4. 相手の気持ち

自分のことを心配するだけでなく、相手の気持ちを重視するため、相手に満足できないという不安がある人も存在した。鈴木さんは今まで付き合ったことがなかったが、恋人が欲しくないわけではない。恋人を作らない理由は、自分への自信がないこと以外に、「相手を幸せにできる」自信が無いことであると語っている。

筆者：・・・鈴木さんは恋人が欲しくないですか？
鈴木：うーん、中学校の頃は・・・とりあえず今の話が、今は何かできたら欲しいけど、そんななんだろう、できたら欲しいぐらいで、でも、相手を幸せにできる自信がないから作らないって感じで・・・付き合っ、相手に不快な思いとか、ちょっと嫌だなあって思われたくないとか。

人たちは幸せのために恋愛関係を始める。鈴木さんの場合は、自分の幸せを考えるだけでなく、相手の幸せも重視している。相手を幸せにできない、相手に嫌われるなどの心配があるため、恋愛に入らない。

5-1-5. 小括

ここまで6人の調査対象者について、恋人を作らなかった理由、またその自信がないという理由を分析してきた。自信がない原因としては、「容姿（見た目）」、「性格」、「他人との比較」、「相手の気持ち」の4つがあった。リスク意識から見ると、自分の見た目や性格に自信が無いため、自分のことが好きかどうか、将来的に相手は自分のことを嫌いになり、他の人に好きになるかもしれないという恐れがある。結果として、良い恋愛関係を持ってないという恐れにつながる。いずれの場合でも、本来幸せのための関係であるはずの恋人を作ることによって、自分が傷つくことになるかもしれない。図5で示すように、自信が無いため、相手から告白されても、相手は本当に自分のことを好きかどうか疑う。調査対象者（山本さん、渡辺さん）の発言からも

聞かれたように、嫌われても、別れても、自分の精神や体に悪い影響を与えることになる。そうしたリスク意識によって、相手から告白をもらっても、その真実性を疑い、断る、また考え込んでしまう人が多い。その一方、自分の方から告白して断られると、自分の心身が傷つくだけでなく、告白する相手とのその後の関係が壊れることを心配し、好きな相手がいても告白しない対象者（鈴木さん、田中さん）もいた。

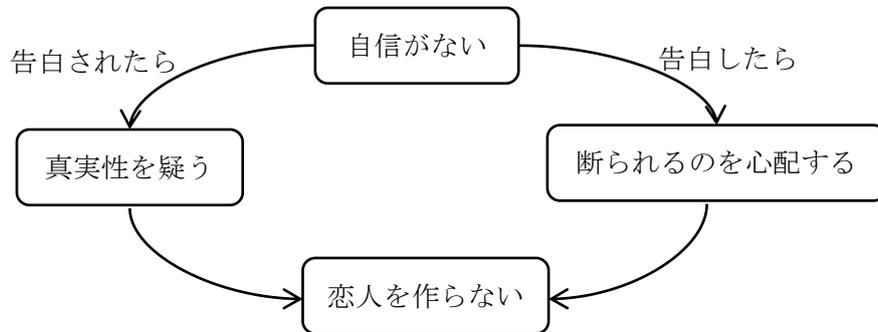


図 5. 自信がないことと恋人を作らないこととの関係

片瀬（2016）がいうように、リスク意識から考えれば、「現代の若者が、より敏感になりつつあるのは、自己の選択がもたらすポジティブな結果ではなく、そこで生じるネガティブな結果」である（片瀬, 2016）。つまり彼女たちは、恋愛によって得られる幸せを考える前に、失敗したらどうなるかを優先的に考えていた。これは「失敗する」というリスクである。このリスクは自信と繋がっている。

ここで、比較のために、恋愛について「自信がない」と語っていない人の語りも見てみよう。渡辺さんが初めて恋人ができたのは高校一年生の時であった。渡辺さんの場合は、「自信がない」という意識はなく、交際する前の心配事は相手の浮気に関する心配だけであり、失敗するリスクを考えてはいなかった。

筆者：初めての恋人を作ったのはいつですか？

渡辺：高校1年生のときでした。

筆者：高校1年生ですね。その付き合う理由、きっかけは何ですか？

渡辺：えっと、きっかけは、自分の友達が違うクラスにいて、そこで知り合った友達だったんですけど、好きになった人。はい。でもその人彼女いたんで、その当時、はい。なんか別に話せばいいやって感じだったんですけど、半年後別れて、その方の家族が亡くなってしまったんです、病気。それをこう話聞いたりしてて、で仲良くなっていて、付き合いました。

筆者：付き合う前に、何か心配なことがありましたか？

渡辺：なんか結構遊び人って言われてたので、浮気の心配とかしてたかもしれないです（笑）。

筆者：そうですね。で付き合い中で、何か心配がありましたか？

渡辺：ああ、付き合いからは、なんとまあその浮気の心配というよりは、何だろう、どっか行っちゃわわないかみたいな、本当に自分のこと好きなのかなっていう心配は結構ありました。

佐藤さんにも、恋愛する中で「自信がない」という意識はなかった。中学三年で初めてできた彼氏とは、話すことが楽しいと感じて付き合い始めた。佐藤さんの場合も、失敗するリスクよりも、楽しく話せるということを優先していた。

筆者：はい。次は佐藤さんの恋愛経験について聞きたいんですけど、初めて彼氏ができた時はいつごろですか？

佐藤：中学3年生。

筆者：中学3年生ですね。その時はなぜその人と付き合いたいと思ったんですか？

佐藤：うーん（笑）。若い時。身近だったのがなんか一番。うん、同じクラスで、はい、で、結構話すのが楽しかったですよ。

中村さんは対象者9人の中で交際時期が一番早く、小学校6年の時に彼氏をつくっている。中村さんも二人でいることが楽しかったことから付き合い始めており、そこで失敗するリスクについては考えていなかった。

筆者：中村さんは最初付き合ったのはいつですか？

中村：小6、小6です。

筆者：えー、早いですね（笑）。

中村：（笑）

筆者：その最初の恋人を作ったきっかけは何ですか？

中村：きっかけ何だったけな。たぶん同じクラスの人だったので、そこから結構一緒に遊んだりして、多分そこから興味があったんじゃないですか・・・です。

以上の3人の場合は、「自信がない」という意識がなかったため、相手と交際する前に、失敗のリスクを考えていなかった。純粹に「相手が好き」、「仲が良い」、「一緒にいて楽しい」などの理由で交際を始めた。しかし、小林さんのように自分に自信がない人は、相手を好きになっても、失敗するリスクを考えることによって、その後の行動に発展しなかった。さらに田中さんのように、相手から告白されても、それを断ってしまった人もいる。つまり、「自信がない」と語る小林さんや田中さんは、ネガティブな結果を優先して考えている。それに対して、渡辺さんのような「自信がない」という意識が無い対象者3人は、ポジティブな結果を優先して考えているといえよう。

自信が無いことは、人の恋愛行動に強い影響を及ぼす。今まで恋人ができなかった鈴木さんは、自分への自信も、人と付き合う自信もない。彼女は将来、結婚したいと思っているが、恋愛する自分を全然想像できず、恋愛をせずに、婚活パーティーなどに参加することで結婚し、人生が終わると思っている。

筆者：・・・将来恋人を作って恋愛したいですか？

鈴木：ああ・・・全然想像ができなくて。なんか結婚するのは想像できるけど、恋人と、恋人を作るのが想像できなくて。

筆者：でも恋人ができないなら結婚も難しいですね。

鈴木：なんかその時はその結婚する年齢 20、30 歳、手前 29 歳とかになったら、そのお見合いとか、その婚活パーティーみたいなやつで、出会って結婚するんじゃないかなみたいな、そんな恋愛をしないかも、なんか付き合うってことをしないで人生終わるのかなって思っています。

自信が無い原因について、以下表 4 にまとめた。自信がないため恋愛関係を始めないのは、実際に失敗の結果を心配する。9 人の中に、6 人がこのような心配があった。つまり、この 6 人は恋愛したら何を得られるかを考える前に、失敗したらどうなるかを優先的に考えていた。ここで、佐藤さん、中村さん、渡辺さん 3 人は失敗の心配がなく、他の理由で恋愛関係を始めないため、後の部分で分析する。

表 4. 自信がない原因

対象者	容姿（見た目）	自身の性格	他人との比較	相手の気持ち
伊藤さん	○			
小林さん	○			
山本さん	○		○	
田中さん		○		
高橋さん		○		
鈴木さん			○	○
中村さん				
佐藤さん				
渡辺さん				

5-2. 悪い影響

恋愛による自分への影響について調査したところ、前節で示したとおり、「精神的支柱」や、「食生活の改善」、「部屋をきれいに保てる」と言った良い影響が語られた一方で、悪い影響もについても言及していた。ここでは、対象者たちの恋愛による悪影響についての語りを分析しながら、対象者たちの恋愛リスクを探究していく。

5-2-1. 時間への影響

まず、恋愛することは時間に大きな影響を及ぼす。小林さんは受験期間で、勉強に集中したいその時に彼氏ができた。当時、勉強と恋愛の同時並行がとても苦手で、時間の使い方などに悩んだ様子を語った。

筆者：うーん。でなんかそれは初めての恋愛なので、恋愛する前に、なんか相手はどんな人だろうとか、その将来のことについて、自分のことについて、何か心配や不安がありますか？

小林：ああ。でも、なんか受験でそういう地元離れたかったの、何て言うか遠距離になるのは必ず決まっていた感じがしたから、それはなんか長く続かないなっていうのと、勉強に集中したいので、なんかその同時並行がすごい苦手だったから、結構悩んでましたね、時間の使い方とか。

筆者：なるほど。でその相手と付き合うことは、自分の生活に影響がありますよね。時間が少なくなったことですね・・・

小林：結構（勉強に）集中しちゃってたその頃は。だから、そうです、あんまりよくない感じ（笑）。

このような経験があったため、小林さんに恋愛についてどのようなイメージを持っているか尋ねると、「余裕がある人たちがするもの」と語った。つまり、小林さんは、前の恋愛経験から、恋愛することは時間を無駄にし、自分のことに集中できないといった印象を持っていた。そのため、恋愛によって余裕が無くなると考えた。また、自分の時間が充実している時は恋愛に全く興味が無かったという。

筆者：はい。小林さんにとって、恋愛はどういうイメージがありますか？

小林：余裕がある人たちがするものっていう感じ。
（中略）

筆者：今まで恋愛に興味がない時はありますか？

小林：ああ、うん、やっぱり受験とか、そういうバイトが忙しかったりとか、自分の時間がすごく充実してる時はいらないなと思います。

この点について、佐藤さんは小林さんと同じように考えていた。佐藤さんは今まで恋人をつくっているが、高校の時は全然恋愛に興味が無かった。佐藤さんにとって、恋人を作ることは自分の時間を自由に利用できないことに繋がる。

筆者：恋愛の悪いところがありますか？

佐藤：ああ、自分が忙しいときに、どうしても相手のことも考えないといけないから、自分だけの時間を作るのが難しい、いろいろと考えることが増える。

(中略)

筆者：・・・佐藤さんは恋愛したくない時期がありましたか？

佐藤：高校の時は全然恋愛興味ないみたいな感じで。

筆者：なぜですか？

佐藤：勉強と部活のこの二つでも、生活がパンパンだったんですよ。それで、うん、その時は恋愛をしたらただ忙しいだけだろうなとか思ったし、ほかのやりたいことがあったので、それを邪魔だなんて思って、恋愛いらなくなってるって思っていました。

筆者：え？もし将来仕事が忙しい時は？

佐藤：もしかしたら邪魔って思っちゃうかもしれない。

伊藤さんも恋人を作ることによる時間への影響について、以下のようにマイナスの側面を語っている。

筆者：恋人ができる前と後で、生活について何か変化ありますか？

伊藤：ああ、私はありますね。そうですね。付き合ってる人に何か依存しちゃうところがあるので、結構会いたくなったら、会いに行ったり来てもらったりしてると、なんかどうしても、まあ勉強の時間とかはちょっと減ってると思います(笑)。

山本さんは恋愛したくない時期については言及しなかったが、恋人と一緒にいることで自身に及ぼすマイナスの影響について、以下のように語っている。

筆者：今まで恋愛したくない時期がありましたか？

山本：いや、したくない時期。そうですね、あ、たぶん彼氏がいたら、安心できる人がいればすごく支えられるなあと思います。いままでの傾向で、私が一緒にいてストレスしかなかったから、仕事の邪魔になりそうで、というのがあって・・・逆に仕事に集中できないのは、いやだなあと。

鈴木さんは今まで付き合ったことがなかったが、恋愛に対するイメージを尋ねたところ、以下のように語っている。鈴木さんのような交際経験が無い人も、恋愛をすることは自分の時間に影響するかもしれないというマイナスのイメージを持っていた。将来恋愛しても、自由な時間が少なくなるという点に気にする。

筆者：鈴木さんは今、恋愛と言うと、まず何が浮かび上がりますか？

鈴木：ああ、ロマンチックと幸せそう（なイメージ）。で、あと、人生すごい恋愛してる子が、かわいくなったり、綺麗になってるから、すごい人生が華やか、キラキラしている感がしました。すごいなー（笑）。と、一方で、その悩み事が増えたりとか、あと時間が拘束されたりとかして、ちょっと面倒くさそうだなあ・・・

（中略）

筆者：恋愛したら、結婚したら、自分の生活にどんな影響があると思いますか？

鈴木：確かに自由な時間が少なくなるのは、なんか嫌なことなんですけど、それを許してくれないとちょっと困るかなあっていう・・・

以上のように、対象者たちの経験から、恋人を作ることは確かに自分の時間へのマイナスの影響があった。そのため、相手が自分にとって安心できる人であるかどうかという考慮も生じた。また、交際経験が無かった人にとっても、恋人ができることによって、自分の時間が拘束されるかもしれないという不安もあった。

5-2-2. 人間関係への影響

恋人を作ることは、時間に影響するだけでなく、自由な時間が少なくなることによって、友人との人間関係への影響もあることが分かった。渡辺さんは以下のように語っている。

筆者：・・・恋愛は自分の勉強とか、友達との関係に何か影響ありますか？

渡辺：勉強の影響はなかったんですけど、なんか友達よりは恋愛優先みたいになっちゃってた時期もありました。それが良くなかった（笑）。

筆者：友達と一緒に遊ぶ時間が減っていましたね。

渡辺：うん、減ったとか、恋人がいるから、別に友達いい、みたいな気持ちになっちゃったりとかしてました。

（中略）

渡辺：・・・自分だけでも楽しいから、今までは結構一人でいるのが寂しいなーって思ってたんですけど、今別に寂しくないっていうのもあって。

筆者：友達がいるから？

渡辺：ですね。友達、そのバランスが取れるようになったと思います。恋愛と友達。

筆者：恋人がいる必要がないという感じですか？

渡辺：そうですね。必要性が昔より無いのかもしれない。

佐藤さんも渡辺さんと同じように考えている。

筆者：で、恋人ができる前後で生活に何か変化がありますか？

佐藤：えーと、彼という時間が多くなって、友達と遊ぶ時間がちょっと減ったかなと思います・・・

中村さんは初めて恋人ができたのは小学校六年生の時であったが、中学・高校では付き合ったことがなかった。その理由は、周りに女の子が多く、友達との関係で満足し、特に寂しくないと感じたからである。恋愛に興味がないわけではないが、恋人を作る必要がないと語っている。

筆者：中学校で付き合った経験がありますか？

中村：あ、いや、なかったですね。

筆者：高校の時は？

中村：高校もなかったですね。

筆者：えー、その時、中学校と高校の時は、なぜ恋愛しなかったですか？

中村：そうですね。なんか結構周りが女の子が多くて、出会いがないっていうか、なんかあんまり・・・

筆者：寂しくない？

中村：あ、寂しくない感じで、もう友達で満足して・・・

筆者：友達には恋愛する人は多いですか？

中村：その時は何かいつも一緒に行動していた人にはいなかったです。彼氏いたりする人はいなかったです。

筆者：その時は恋愛に興味がありますか？

中村：興味はあったけど（笑）・・・

筆者：（笑）でも人間関係に満足するので、必要がないと思いましたね。

中村：そうですね。

友人関係の満足感から恋人を作る必要を感じないという点について、田中さんと高橋さんも以下のように語っている。

田中：・・・別にいいから、いなくても、友達で楽しいし、いいかなってなっていました。

高橋：・・・そもそも私の中学校と高校でそんなに、こう付き合ってる人が、まあ目に見えるところではあんまりいなかったっていうか、うん、こんな普通のことではないしなあみたいな、わりと女同士で仲良くしたり、男同士仲良くするっていう友人関係が多かったんで、そうですね。そんな感じですね。

恋愛することで自身の人間関係に起こったマイナスの影響としては、以下の2つがあった。まず、渡辺さんと佐藤さんのように、恋愛することで友達と過ごす時間が確かに減ったということである。そこには、「恋人がいるから、友達とは別にいい」という気持ちもあったという。中村さん、田中さん、高橋さんの場合は、恋愛をすることが人間関係に影響する点については直接言及しなかったが、現状の人間関係（ここで

は友人関係)に満足できるため、恋人を作らないと語っている。つまり、新たな人間関係(ここでは恋愛関係)を作ることによって、今の人間関係のバランスを崩すかもしれないという恐れがある。それは「友達を失う」リスクである。インタビューの結果から見れば、恋人を作るとは恋人以外の人間関係に影響するだけでなく、告白することで、告白の対象としての友人を失うリスクも存在している。これについて、鈴木さんは以下のように語っている。

鈴木:・・・あの一応今好きな人がいて(笑)。
筆者:ええ、そうですか。その子は鈴木さんの好きな気持ちを知っていますか?
鈴木:知らないんじゃないかな。結構お話をする仲間だけど、うん、本当すごい友達として接してくるだけなので、うん、絶対気づいてないと思います。
筆者:自分から告白することは全然無理ですか?言にくいですか?
鈴木:言にくいのと、あと、そのもし失敗した時に関係がまた壊れてしまうのが怖くて、言にくいっていうのがあって、だから多分言うとしたら、その人と本当に別れる直前、卒業していなくなる時に、一言だけ言って離れると思います。

同じように田中さんも告白の対象としての「友達を失う」リスクについて、以下のように語っている。

筆者:・・・恋愛で、一番心配なことはなんですか?
田中:その、なんだろう、好きな人と遊びに行ったりとかして、あのもしなんかいい感じになって告白したとするじゃないですか、どっちから。
筆者:はい。
田中:で、ごめんなさいって言われちゃったら、振られるのは仕方ないんですけど、その後にもう一回仲良くなるって、まあできないじゃないですか。
筆者:ああ、はい。
田中:それがちょっと、一回の告白で友達一人減るのかと思うと、ちょっとこう気になっちゃうな一って・・・

以上のように、交際経験があった対象者たちにとって、交際することは確かに自身の人間関係への影響があった。また友人関係に満足する対象者たちは、恋人を作る必要がないと思っていた。今まで恋人ができなかった鈴木さんと田中さんは、告白が失敗すれば、友達としてのその相手を失うことを心配していた。総じて、恋愛することは、自身の人間関係に対してマイナスの影響を及ぼすリスクを伴っている。

5-2-3. 気分への影響

5-1でも論じたように、恋愛の失敗は気分に影響を及ぼす。また、交際の過程で自身が傷つくこともある。山本さんは彼氏と別れるまでの二か月間喧嘩ばかりで、精神的に非常に苦しくなり、周りの人を心配させたという。

筆者：それは（恋愛することは）自分の生活に何か影響がありますか？人間関係とか。
山本：そうですね、まわりの友達から後で言われたんですが、すごく顔が暗いって言われたんですね。彼氏さんと別れる前の二か月間に、すごい、喧嘩ばかりで、あまり好きじゃないかもという思いになってたの、どうしたら好きになってもらえるんだろうなって感じで、ずっと悩んでいて、周りから山本ちゃん元気ないねって言われて。恥ずかしい話、その時悩みすぎて、眠れなくて、けっこう泣いちゃったりとか。その時若かったですね・・・

渡辺さんは恋愛による感情の起伏について次のように語っている。

筆者：なるほど。では高校生の時、その人と付き合うことは、自分の生活に何か影響がありましたか？
渡辺：変わりましたね。影響っていうか分からないんですけど、毎日楽しくなりましたし。でもなんか逆に恋愛に振り回されてるな、みたいな、携帯いじるのも文句になったし、あと何だろう、喧嘩したらすごい落ち込みたいという感情が揺れ動いて（笑）って感じ。

恋愛することは、時間や人間関係への影響があるだけではない。対象者たちの語りからは、別れや喧嘩が直接自分の身体や心に影響している様子が伺えた。

5-2-4. 小括

ここまで、恋愛による悪い影響について分析してきた。その影響には、時間への影響、人間関係への影響、気分への影響の3つがあった。時間への影響について、まず恋人ができることによって、相手のことを考えなければならない点がある。恋愛によって自由な時間や自分だけの時間が少なくなり、集中できない時間も増えたため、勉強や仕事の邪魔にならないように恋人を作らない人もいた。

人間関係への影響について、1つ目は、恋人を作ることで、友達と一緒にいる時間が減ったというものである。友達より恋人を優先してしまうことで、自身の友人関係に悪影響を及ぼした。本文で見てきた渡辺さんは、恋人を作らない理由を、今の友人関係に満足し、恋人を作る必要がないからだと言っている。恋人ができたら、今の人間関係に影響があるかもしれないと思い、又は友達と恋人とのバランスが取れないため、恋人を作らないのだという。2つ目は、鈴木さんと田中さんのような、相手への告白が失敗したら、友達としてのその一人を無くしてしまうかもしれないというものである。これらは「友達を失う」リスクである。

そして気分への影響について、多くの場合は喧嘩が原因で落ち込み、精神的に苦しくなり、泣いたり眠れなかったりするものである。山本さんと渡辺さんのように、交

際した後、それを振り返った際に、このような心身への悪い影響を気にする人もいた。

対象者たち9人は、恋愛によって、少なからず自身に対するマイナスの影響を経験している。或いはそうしたリスクに対する防御策として自身への影響を予想した。5-2の自分自身への悪い影響についての語りを分析した結果、自身の人間関係への影響について語った人は一番多く、9人中6人であった。次いで時間への影響を語った人は5人、気分への影響を語った人は2人いた（表5）。

表5. 恋愛による自分への影響

対象者	交際経験の有無	時間に影響する	人間関係に影響する	気分に影響する
伊藤さん	○	○		
小林さん	○	○		
佐藤さん	○	○	○	
山本さん	○	○		○
中村さん	○		○	
高橋さん	○		○	
渡辺さん	○		○	○
田中さん			○	
鈴木さん		○	○	

5-3. 交際相手の条件

5-2では、恋愛することで起こる悪影響について論じた。しかし、付き合うということには相手の存在も不可欠である。恋愛には「どんな人が良い」、「どんな人は絶対にだめ」など、つまり、恋人の条件も重要であろう。相手の存在も自分の恋愛行動に影響する。結婚相手に求める条件について、2022年の第16回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）によると、男性に比べ、女性の方が相手の学歴、職業、経済力を重視・考慮する傾向があり、第10回（1992年）調査以来、その傾向は変わっていない。変化としては、女性の方で相手の「家事・育児の能力や姿勢」を重視する人が増えた（1997年調査の43.6%から2021年調査の70.2%）。また相手の「容姿」を重視・考慮する女性が増えた一方で（1992年調査の67.6%から2021年調査の81.3%）、相手との「共通の趣味」を重視・考慮する女性は減っている（1997年調査の78.9%から2021年調査の72.2%）。恋人の条件について、本調査におけるインタビューの結果では、身体的特徴や経済力より、性格、価値観、自分のことを大事にしてくれるかどうかなどを重視する人が多かった。また、山本さんのように自分の幸せを優先する人もいた。山本さんは自分の幸せについて次のように語っている。

筆者：山本さんにとって、恋愛のイメージはどんな感じですか？

山本：そうですね。イメージとしては、本当に抽象的なんですけど、自分の幸せが中心に、核にあるんですよ。で、そこに何て言いますか、恋愛が核に入ること、その核が壊れるか壊れないかみたいな感じなんです。もし壊れるようだったら恋愛をしたくないみたいな。

つまり、山本さんの場合は、自分の幸せが壊れるようだったら恋愛をしたくないと考えている。恋愛によって幸せを得られるかもしれないことより、現在の幸せを壊さないことを優先に考えていた。高橋（2010）は21世紀初頭の若者の言表の特質について、誰かと交際することが「楽しみやチャンスとしてではなく、リスクやコストとして立ち現れているという点」にあると述べている（高橋, 2010）。山本さんの考えはこの「リスク」意識と一致している。つまり、現代の女性にとっては、恋愛することで幸せを得るより、自分が傷つかないということが一番重要なのである。自分が傷つくかどうかは、自分だけではなく、相手の存在とも密接に繋がっている。そのため、恋愛関係を始める前に相手のことも知っておかなければならないのだ。ここでは、対象者たちの相手への条件を分析することで、女性の付き合う相手に対する心配、つまり交際相手の問題というリスク意識を分析していきたい。

5-3-1. 依存できない相手

交際する際に重要なことは何かと聞くと、「身近であること」が重要だと答える人がいた。また、対象者たちに今までの彼氏と別れた理由を聞いたところ、表6のように、距離の問題が一番多かった。つまり、彼女たちにとっては、相手は依存できる存在かどうかということが重要である。彼女たちの語りによると、この依存には「物理的近接」と「心理的近接」がある。「物理的近接」とは、相手が物理的に自分の近くにいることで、「心理的近接」とは、相手が自分の近くにいなくても、電話やネットを通じ、いつでも連絡できることである。

表 6. 恋人と別れた理由

対象者	交際経験	距離の問題	価値観の問題	性格の問題
伊藤さん	○	○		
小林さん	○	○	○	
佐藤さん	○	○		
山本さん	○	○	○	
中村さん	○	○		
高橋さん	○			
渡辺さん	○			○
田中さん				
鈴木さん				

① 物理的近接

まず、相手には近くにいるほしいと思う人の語りを分析していこう。佐藤さんは相手との距離を非常に重視している人である。初めて恋人ができたのは中学校三年生の時であった。その時の佐藤さんにとって、身近であることは一番重要であった。その後、二人は別々の高校に進学したことにより、半年で別れるに至った。

筆者：・・・その時佐藤さんにとって、相手に対する一番重要なことは何ですか？恋愛する条件とか、若い時（笑）。

佐藤：（笑）若い時。身近だったのがなんか一番。うん、同じクラスで、はい、で、結構話すのが楽しかったんですよ。その身近っていうのは、何か自分が与えたんじゃないかなと思います。

（中略）

筆者：で、その初めての付き合う経験はどのくらい続きますか？

佐藤：ああ、一応半年ぐらい。

筆者：半年、はい。最後なぜ別れたんですか？

佐藤：最後？うん、高校が別々になってしまって、はい。

筆者：ああ、距離の問題ですね。

佐藤：はい。高校は別々になって、会わなくなって、お互い忙しいねっていう理由で別れました。

筆者：やっぱりその時は佐藤さんにとって一番重要なのは、一緒にいる、そのことですね。

佐藤：うんうん、そう思います

続いて、佐藤さんには二人目の彼氏のことも聞いた。そこでも、付き合う前に一番心配だったのは距離の問題であり、最終的にはまた、その距離の問題で別れるに至った。

筆者：・・・付き合う前に何か心配なことがありましたか？

佐藤：ああ。まあ大学に入るじゃないですか、で大学がその二人目の人は東京の大学にいくっていうことだったので、やっぱり距離とか、そこが一番受け付けなくて・・・

（中略）

佐藤：・・・それで、あの、コロナの流行って、彼も東京からこっちに、実家に帰ってきてて、こう会う回数が多かったんですよ。

筆者：はい。

佐藤：だから距離は近かったから良かったんですけど、その頃に私が今度青森市か弘前市に一人暮らしする、実家出ることになったんです。ちょっとお金の話なんですけど、そこでまた距離が離れてしまって、なんか、思いが自分の中へ入ってなくて、その距離の遠さっていうことがきっかけに、お別れになってしまった感じですよ。二人目の彼も。

渡辺さんは今まで恋人が何人かできたが、現在は恋人がいない。恋愛に興味はあり、恋人も望んでいるが、現在大学四年生で、付き合ってもすぐ卒業で遠距離になってしまう可能性がある。

筆者：・・・では恋愛の映画を見ますか？

渡辺：あ見ます見ます、好きです。

筆者：好きですか？では映画を見て、なんか恋人が欲しいという気持ちがありますか？

渡辺：ありますよ。恋人欲しくなりますね。

筆者：ではなぜ今恋人を作らないんですか？

渡辺：うーん。あー、なんか今大学4年生で、もう卒業間近じゃないですか、こう遠距離になってしまうっていうのがありますよね。今付き合ったら・・・

山本さんは常に恋人と一緒にいたいと考えており、付き合う条件として、相手が近くにいることを期待している。山本さんは現在の彼氏と付き合ってもうすぐ1年になる。将来についての心配について聞くと、二人とも大学4年生であることから、今後就職によって遠距離の関係となる問題があるという。

筆者：・・・付き合う前に恋愛に何か期待がありましたか？

山本：そうですね。期待は、高3の時に憧れてたそとでデートだったりとか、一緒にご飯を食べたりとか、なんか二人、カップルでなんかやりたいことみたいな、なんとなく区分が、友達と一緒にやってもいいですけど、これもやっぱり、恋人と一緒にやりたいなってことがあったりして、そういうことをやれたらいいなあみたいな。

(中略)

筆者：なるほど。今もうすぐ一年なので、将来について何か心配がありますか？

山本：いまのところの不安は、この間二人が今就職活動をしています。やっぱり気持ちですが、どうしても今、決定的に違うっていうこと、私は秋田ですけど、あちらは東京、遠距離ですね。たぶん今触れないようにしてはいるんですけど、たぶん、今後はね、ここが心配かなと思います。

中村さんは現在大学2年生で、初めて恋人を作ったのは小学校6年生の時であった。二人は別々の中学校に行き、疎遠になってしまったことによって別れた。

筆者：その恋愛はどのぐらい続きましたか？

中村：中1、中学校1年生。うん、そんなに、そんなに長くない。

筆者：別れる理由は別々違う学校に・・・

中村：あ、そうです、そうです、そうですね(笑)。

筆者：はい。なんかうまくいかないと思う時はありましたか？喧嘩とか。

中村：最初の方は・・・そうですね、あ・・・ありましたね。

筆者：その時喧嘩の理由はだいたい何ですか？

中村：喧嘩の理由・・・喧嘩っていうより、なんか疎遠になってしまって、あまり連絡取れなくなったってやつなんですけど、距離離れたことが一番の理由ですが・・・

高橋さんは現在の彼氏が初めての恋人であり、付き合ってもうすぐ二年になる。高橋さんは現在大学4年生で、彼氏は昨年4月から青森市で働いている。大学生と社会人ではスケジュールも違い、距離の問題もある。高橋さんの場合は、距離の問題が恋愛関係にそんなに強い影響を及ぼさなかったが、不便になることがたくさんあった。

高橋：そうですね。今私が弘前に住んで、相手は青森で働いててっていうので、大学生と社会人だと、過ごす時間の感じも違うし、距離もあるんで、全然そうですね。4月になってから、あんま、一ヶ月に一回あるかないかぐらいで。でも県内ではあるので、ちょいちょい会ってはいるんですけど、そうですね。会えない。今月先月あたりから、やっぱりコロナが青森でも弘前でもやばくなってきてて、やっぱりそうですね。それでこう会える予定があったけど、なくなってみたいなのもあって、そうですね。もう三ヶ月ぐらい会っていないかなあ。

筆者：その距離への心配がありますか？

高橋：そうですね。でも来年就職するのも青森市なので。

筆者：ああ、そうですか。

高橋：そう、でも、あのそれぞれ多分お金貯めるために一旦は実家でそれぞれなんか過ごしながらか働いてっていう感じが、多分五年ぐらい続くと思うので、その間はほぼ休みしか会えないし、うん、まあ土日は遊べるかもしれないけど、お互い忙しい。まあ距離の心配は、今が一番、私が大学にいる間は、やっぱり、彼氏が車持ってるので、こっちに来てくれることもあるんですけど、そうですね。1時間ぐらいはかかるし、疲れるんだろうし、でもあの申し訳ないし。たとえ私が青森に行っても、そうですね。あの彼が住んでいるのは実家なので、結局泊まりとかもできないから、日帰りですぐ帰ったりみたいなので、結構大変だなと思うときはありますね。県内ではあるから、そんなに。

以上のように、多くの対象者たちは相手に側にいてほしいと考えていた。何かあったらすぐ相手と会えること、つまり物理的的近接が可能であることが重要である。

② 心理的近接

今回の調査では、物理的的近接だけでなく、心理的的近接についても回答が得られた。伊藤さんは高校3年生の時、日頃のストレスを当時の彼氏に依存することで癒していた。

筆者：大学の前の恋愛の別れる理由はなんですか？

伊藤：その高校生の彼氏ですね。

筆者：はい。

伊藤：性格が、ええと、多分、高校3年生の時に付き合ってたんですけど、なんか受験勉強がちょっとストレスで、すごい学校に行くのが嫌で、ちょっとなんかメンタルが良くなかったですね。で、その彼氏になんか依存っていうか、電話とかずっとしたりして、なんかすごいいっぱい泣いたりして、その学校とか勉強とか色々いやで、それで、すごい彼氏の時間を取っちゃって、振り回しちゃってたので、ちょっと彼氏に限界が来ちゃって、疲れちゃったみたいです。あっちからも無理だみたいな感じで言われて、はい、そうでした。

そこで、伊藤さんは交際する際に重要なこと（表 2-9）について、以下のように語った。伊藤さんにとって、相手に依存できるかどうかは一番重要なことであり、またその相手にも同じような感覚を望んでいる。

伊藤：えっと、その高校生の時の彼氏はあんまり恋愛に興味がない人で・・・付き合い合ったことに対して、なんか執着してないっていうか、感じがあったんですけど、私自身はその結構恋愛に、なんか恋愛体質みたいな感じなんで（笑）、やっぱ相手も付き合う人もそういう人じゃないと、やっぱ考えが合わないなあと思って、大学に入ってから、そういう恋愛体質の人っていうか、ずっと一緒にいても疲れな人っていうか、そういう人の方がいいなあ。

佐藤さんは前述したように、遠距離になったことが理由で、過去の二人の彼氏と別れてしまった。現在の彼氏は同じ学校で距離の心配はないが、他の心配について次のように語っている。佐藤さんの場合は、相手が側にいることを重視するだけでなく、精神的に支え合える関係であることも重要だと考えている。

筆者：・・・付き合う前に何か心配がありますか？前の付き合いと比べて。

佐藤：前と比べて、うん。（その前の）二人とちょっと違って、彼は何か結構こう大学生にもなったからかわかんないんですけど、飲みに行く機会が多くて、で結構交流が多い人なんです。だから、そういう点では、なんかちゃんとこう私だけを見てくれるのかなという心配もありますよ。ありましたね。

（中略）

佐藤：・・・一人のときは、二人のときよりちょっと気持ちが弱くなったような気にするんです。相談するとか、弱音を吐ける相手がいるって思うと、なんか結構不安な時とか、すぐ相手に行っちゃうようになりました。はい。

渡辺さんが恋愛によって受けた一番大きな影響は、恋人に精神的に支えてもらったことだという。しかし、精神的に支え合うといった関係ではなく、一方的に依存してしまったという。

筆者：なるほど。じゃあ大学時代の恋愛は、自分の生活に何か影響がありましたか？

渡辺：うん。でも、精神的に支えてもらった部分が大きいです。逆に依存してしまったので、良くなかった。

山本さんは初めて付き合う前の、自分の性格についての不安を次のように語った。

筆者：付き合う前に何か不安や心配なことがありましたか？

山本：そうですね。付き合う前は、ちょっと私の性格のよろしくないところかもしれないんですけど、すごいあんなに良い人で誰かにとられちゃったら嫌だみたいな。ちょっと独占欲強め（笑）な感じになったので、ちょっとそこで焦りがありました。そんな感じですかね。

山本さんの場合、恋愛においてはその相手に依存したいと考えている。山本さんの二人目の彼氏は交友関係が男女を問わず広がったため、その時の不安について次のようにも語っている。

筆者：では、二人目の方と付き合うことが、自分に何か影響がありましたか？
山本：二人目の方、すごい友好関係が広い方です。（私の）すごい仲良しグループ（3人いる内）で、他の子とも付き合ってた、ちょっとがっかりしたんですが、私はすごい嫉妬しちゃったんで、もっと私に時間を割いてくれないか、みたいな感じです。私は、あいかわらず、なんか、不安になってですね。そんな感じです。
筆者：了解です。最後に別れた理由は何ですか？
山本：そうですね。別れたのは、あちら側が思ってたのと違うというか、ちょっと、やっぱり、あちらがすごい、自分の時間をすごく大切にしている、忙しくて、で、私はさんざん言われましたね、ずっと彼氏とイチャイチャしたいっていう。ぶつかっちゃって・・・（彼の方が）最後好きかどうか分からなくなった。私はちょっと好きだったんですけど・・・

中村さんが前の彼氏と別れた理由は遠距離になってしまったことである。今の彼氏とはネットで知り合い、付き合ってから何回か会ったが、基本的には遠距離恋愛である。これは物理的近接ができなくとも、心理的近接によって交際が成功している事例である。

筆者：今の恋愛は遠距離の恋愛なので、友達みんな恋人がそばにいたら、なんか自分の心も寂しいなあという気持ちはありましたか？
中村：ああ、そうですね。なんか大学一年生の前に付き合った。大学一年生の時は、周りみんなそう彼氏と一緒にいて羨ましいなって思ったけど、最近はどうそんなに慣れてきました。
筆者：ああ、慣れました（笑）。
中村：（笑）慣れましたね。
筆者：で毎日LINEとかで・・・
中村：毎日電話してます。
（中略）
筆者：で、なんか相手はそばにいないので、そこで何をしているのかをちょっと分からないので、心配とかがありましたか？
中村：そうですね。これも一年生の時はすごく心配だったんですけど、もう「今何してるか」みたいな感じだったんですけど、今はもうだいぶ・・・
（中略）
筆者：なるほど。はい。で、中村さんにとって恋愛する時一番重要なことは何ですか？
中村：えっと、そうですね。相手がなんか自分のことを大事にしてくれるかどうかが一番ですかね。

次の小林さんも物理的な問題には拘っていない。小林さんにとって、相手が側にいなくても楽しくなることができれば、距離の問題はそんなに重要ではないという。

筆者：同じ大学の学生ですか？

小林：あ、違って、その人は地元の先輩。

筆者：はい。で、それも遠距離ですね。

小林：はい（笑）。で、その人は地元札幌じゃなくて、東京にいるから、もっと遠距離みたいなの。でもなんか楽しいし、前の何人かとは違って、本当に楽しく、なんかちょっとだけ将来は考えられたりもしたけど、なんかうまくいかなかったです。

筆者：遠距離のことに心配がありますか？

小林：ああ、最初はめっちゃ心配します。どうせ長く続かないだろうみたいなのは。でもなんか、それでもなんか今が楽しければいいかなって思える人はたぶん続くのかなって思って・・・

相手に依存できることは物理的に側にいることだけではない。多くの対象者にとって、相手は側にいなくても、インターネットなどによって相手と繋がっていることを感じられることは重要である。以上のように、今まで交際経験がなかった2人は言及していなかったが、交際経験があった7人の場合は、物理的あるいは心理的近接というニーズがあった。つまり、彼女たちにとって、恋愛すれば相手に依存できるかどうかということは重要である。

表 7. 相手に対する依存

対象者	交際経験	物理的近接	心理的近接
伊藤さん	○	○	○
小林さん	○	○	○
佐藤さん	○	○	○
山本さん	○	○	○
中村さん	○	○	
高橋さん	○		○
渡辺さん	○		○
田中さん			
鈴木さん			

5-3-2. 性格が悪い相手

恋人の条件について、対象者たちにとってもう一つ重要だったのは性格である。伊藤さんは今まで恋人を何人も作った。相手の条件について、彼女は顔や声などより一番重要なのは相手の性格だと述べている。具体的には一緒にいても喧嘩せず、優しい人が良いと思っている。喧嘩することや優しくない人は以下のインタビュー内容からは、自分が傷つかないことを優先する側面も伺える。

筆者：14歳で初めて付き合った時、伊藤さんにとって、恋愛には何か条件がありましたか？

伊藤：私は顔より性格を見て、そのときは、控えめな人、大人しい感じの人が好きでした。うるさい人とかじゃなくて、静かな人が、そうですね、その時は。

(中略)

筆者：いわゆる高校生ときは、付き合う前により多く考えますね。

伊藤：ううん、なんかちゃんとその人を見て、なんか声が好きだからとかじゃなくて、そうですね、ちゃんとしていたっていうか。

筆者：具体的には？

伊藤：性格、その人の性格、うーん、何て言うんですかね。あの高校生の時の方が落ち着いてたっていうか、自分がつき合っているときに、浮き足立ってないっていうか、なんかちゃんと恋愛してたっていうか (笑) うん。

(中略)

筆者：具体的にどんなことを考えていますか？不安なこととか。

伊藤：ああ、なんかいっぱいあるんですけど、なんだろう、まずやっぱり性格がこの先一緒にいても、喧嘩しないとか。あと私だったらなんか優しい人がやっぱりいいので、怒りっぽい人とかもたまにいるけど、まあそういう人はちょっともう無理って感じ、性格とか・・・

同様に佐藤さんも相手の性格の重要性について次のように語っている。

筆者：佐藤さんにとって、付き合う相手はどこが一番重要ですか？

佐藤：中身かも、性格で、優しい人が好きですね。

一方、高橋さんの場合は、自分が楽しくなれるかどうかことが一番重要だと述べている。その際に、重要なのは顔などの身体的特徴ではなく、相手の振る舞いである。

筆者：高橋さんにとって恋人の条件はありますか？

高橋：条件。うーん。

筆者：はい。恋愛すればどんな人がいいという。

高橋：ああ、難しいけど、でもなんかあんま顔とかではなくて、なんだろうな、そもそももうありえないなって思うのは、なんかもうタバコとか、あとは何だろう、粗行が悪い人 (笑)、ヤンキーみたいな人とかは、もうあと明るい人はちょっと怖いから、わりとおとなしめというか、どっちにも合わせられる人とか言われたくらいの方が、っていうのと、あとは何だろうな、真面目っていうか (笑)、なんだろうな、一緒に話してて楽しい人とか。

渡辺さんは前の彼氏と別れる理由の一つが性格の不一致である。ここでも、高橋さんと同じように、自分が楽しいという感覚が一番重要だと考えている。

筆者：なるほど。その恋愛は最後、別れた理由は何ですか？

渡辺：別れた理由は性格が合わなかった、なんか話し合えなくて、すぐ怒るような人だったって、これじゃダメだよ、みたいな感じ（笑）。

（中略）

筆者：ではもしこれから恋愛すれば、何が一番重要だと思いますか？

渡辺：性格？（笑）話してて楽しいかどうか。

中村さんは自分自身の性格を少し気にしており、相手の性格が自分の性格と合うかどうかの心配をしている。

筆者：なるほど、ほかは何かありますか？

中村：性格は、そうですね。それはもちろんなんか一番最初に付き合う前のイメージがわりと淡泊な人だった。淡泊な人だったイメージなんですけど、それと私が結構なんか感情的な人なので、その馬が合うかどうかというのは心配でしたね。

鈴木さんは今まで交際経験がないが、恋人の条件について以下のように語っている。ここで、興味深いのは、交際経験の無い鈴木さんが友達との会話の中で恋人の条件を形作る様子である。

筆者：では、鈴木さんにとって、恋人ができれば、相手はどんな必要な条件がありますか？どんな人が好きですか？

鈴木：顔とか、うん、えっと私の条件としては、怒らない人、優しい人かな。なんか優しくなくても、なんか無言でもいいから、本当こう大声を出さないみたいな、うるさい人がちょっと怖いのでっていう条件があって、で友達から言われた、その好きな人も結構私も好きな人の傾向は仔犬みたいな人が（笑）かわいいタイプが好きなんだねって言われたことがあります。

5-3 で述べたように、女性たちは自分が傷つかないことを優先する。性格が良くないなら、例えば怒りやすい人は、暴力を振るうかもしれない。これは直接に自分が傷つくことと関係する。そのため、相手の性格を恋人の条件にすることは重要となってくる。

5-3-3. 自分のことを好きになってくれない相手

今回の対象者たちにとって、恋人の条件だけでなく、相手の自分に対する態度も重要である。彼女たちの中には、相手が自分のことを好きになってくれないという心配がある人もいた。山本さんにとって、今一番心配なことは自分が嫌われることである。

筆者：付き合う中に何か新しい心配がありましたか？

山本：そうですね。私のこと嫌いになって欲しくないなあとあって、すごい自分で消えなくなっちゃいますよね、その時。嫌いになってほしくないから、意見の対立を避けたいと思って、とりあえず全部相手に合わせて。その時は。ただその様子は気合いになって欲しくていう不安だったから。

(中略)

筆者：今一番心配なことが何ですか？

山本：一番心配のことですね、そうですね、ここはずっと、やっぱり自分が嫌われなくていいなと、ずっと思っていて。なんか、今の人が、心が広すぎるという感じで、なんでもかんでも、頑張っって彼に好きだと思われるような、私でありたいと努力したいなと、ずっと思っているんですが、そんな感じです。

小林さんも、交際する際に相手に嫌われることを気にして、喧嘩などの衝突を避けていた。

筆者：なるほど、その（前の）恋愛の過程にうまくいけないと思う時はありますか？

小林：うまくいかない時、例えばどういう感じですか？

筆者：たとえば喧嘩とか。

小林：ああ、逆に何か言いたいことが言えなくて、自分で溜め込んでしまったのはあります。

筆者：はい。初めての恋愛と、それまでイメージしていた恋愛とは同じですか？何か違いがありますか？

小林：ああ。喧嘩するほど仲がいいとか言ってたから、なんかもうちょっと自分も我慢してばかりじゃダメなんだろうけど、それで嫌われちゃったら嫌だなみたいな思っていたりしました。

そして渡辺さんは、相手が自分のことを好きではなくなり、他の人に行ってしまうことへの不安を以下のように語っている。

筆者：付き合う前に、何か心配なことがありましたか？

渡辺：なんか結構遊び人って言われてたので、浮気の心配とかしてたかもしれないです（笑）。付き合ってから、なんとまあその浮気の心配というよりは、何だろう、どっか行っちゃわないかみたいな、本当に自分のこと好きなのかなっていう心配は結構ありました。

（中略）

筆者：では大学の際は高校の時と比べて、付き合う前に何か新しい心配がありましたか？

渡辺：心配か。付き合い自体が久しぶりだったので、なんかどうするんだっけっていう感じでした（笑）。恋愛って何するんだっけみたいなのもありました。あ、あとなんか、その人バイト先での同期で仲いいグループがあったので、そっちで女性もいたりして、旅行とかも行ってたので、そういう心配はありました。

筆者：浮気な心配？

渡辺：うん。浮気な心配がしていました。

伊藤さんはこれまでの交際経験が一番豊富な人である。交際するまでは問題なく到達するが、性に自信がないため、性行為をする際に相手に嫌われないだろうかという不安が出てきた。

筆者：その自信がないことは自分の恋愛など何か影響がありましたか？

伊藤：もともと自分に自信がない性格ということもありますが、恋愛する中で、関係が深まればいずれは性行為もすることになるので、性行為をする際に相手に嫌われないだろうか、というような不安を感じることはありました。

互いに好きだからこそ恋愛関係を始めるため、恋人が自分のことを好きになってくれなくなり、或いは他の人を好きになってしまうのは、誰にとっても嫌なことであろう。相手が自分のことを好きではなくなることもリスクの一つとして存在している。

5-3-4. 価値観が異なる相手

また、調査では、恋人の条件として価値観の一致を重視する人もいた。山本さんは前の彼氏と価値観が違い、喧嘩になり、最後には別れてしまった。そのため現在の山本さんにとって、価値観が合っていることは付き合う過程で重要なことである。

筆者：でその時、恋人への条件がありますか？どんな人が好きという感じ。

山本：ああ、そうですね。なんか、価値観が、とか、好きなものが、一緒にあればいいなあ、というのが一つで、もう一つが、自分にはないもの、尊敬できる人がいいなあと。

(中略)

筆者：えー、なぜ別れましたか？

山本：一番なのは、価値観の違いです。何のためお金をかけたとか、お互いの好きなものを否定したの。「いや、おれはそんなものを買わない」って、「そんなもの」と扱われた時に私は一瞬に「うん？」ってなって、その後どんどん喧嘩になって…

田中さんは今まで恋人を作ったことはなかったが、恋人の条件として価値観の一致を挙げている。また、田中さんは山本さんと同じように、尊敬できる人の方が良いと述べている。

筆者：では恋愛すれば、相手に何か条件がありますか？恋人の条件とか。

田中：条件、うーん。自立してるとか。たまに大人になっても、親のお金で借りてみたいなのは、ちょっと情けないなと思って(笑)、そのぐらいですかね。

(中略)

筆者：はい。で恋人ができたことがないですけど、恋愛にどんなイメージがありますか？期待しているとか。

田中：期待している。ああ、なるほど、その、すごい意味が違いかもしれないんですけど、なんか、自分にはないものを知って、あこの人のここがすごいなあって、尊敬して真似しようと思えるのは、何かお互いにいいんじゃないかな、と思って、成長できるのかなあとと思います(笑)。

5-3-5. 小括

ここでは、交際相手の問題というリスクについて分析するために、対象者たちの交際相手に対する不安を整理した。ここで見られたのは、依存できない相手、性格が悪い相手、自分のことを好きになってくれない相手、価値観が異なる相手という問題である。表8のように、一番多かった不安は、相手に「依存できない」とことと「性格が悪い」という不安であった。「依存できない」という不安がある人は9人中7人おり、「性格が悪い」という不安がある人は9人中6人であった。次いで「自分のことを好きになってくれない」という不安であり、9人中4人にこの不安が見られた。「価値観が合わない」という不安を持つ人は9人中2人であった。

表 8. 交際相手に対する不安

対象者	交際 経験	依存できない	性格が悪い	自分のことを好きにな ってくれない	価値観が 異なる
伊藤さん	○	○	○	○	
小林さん	○	○		○	
佐藤さん	○	○	○		
山本さん	○	○		○	○
中村さん	○	○	○		
高橋さん	○	○	○		
渡辺さん	○	○	○	○	
田中さん					○
鈴木さん			○		

では、相手への不安は「リスク意識」とどのような関連があるのだろうか。まず、「依存できない」という不安には2つがある。それは物理的的近接と心理的的近接である。インタビューの結果のように、今まで交際経験があった7人は全員、相手に依存できないという心配があった。つまり、彼女たちにとって、恋人は自分を支える存在である。相手が自分を支える存在でなければ、付き合う必要もない。また、相手と別れた経験がある6人中5人が、その理由を遠距離の問題と述べている（表6参照）。その5人全員は距離があることで、物理的、身体的な依存ができないため、最後には別れてしまった。また、心理的的近接について、中村さんのように、物理的には依存できないが、毎日電話などをすることで、精神的な支えを得ることができるため、相手の依存なくても問題はないという人もいた。相手の依存は物理的なものであれ、心理的なものであれ、依存ができない相手であれば、自分が寂しさを感じる、また幸せになれないというリスクがある。

そして「性格」の問題である。性格が良くない相手は自分への影響が想定しやすい。例えば怒りやすい人は、暴力を振るうかもしれない、そこで二人の性格が合わなければ、喧嘩を頻繁にする可能性もある。これは直接的に自分を傷つけることに繋がる。女性はこのようなことが起こらないように相手の性格を重視している。「優しい人が好き」と言った人も何人がいた。

「自分のことを好きになってくれない」という心配について、恋人が自分を好きではなくなり、或いは他の人を好きになってしまうこともリスクとあってあるようだ。具体的には、渡辺さんのように「浮気される心配」、小林さんのように「喧嘩ばかりで嫌われてしまう」、伊藤さんのように「性行為の際に自分の身体的なコンプレックスによって、嫌われるかもしれない」などの心配があった。このような心配は、交際する過程の中で生じている。

最後は「価値観の不一致」という問題である。価値観が合わないと心配していたのは9人中2人であった。こうした不安が調査対象者の中に少なかった理由について、価値観が合わなくても、直接的に自分に対しての悪い影響が弱いからかもしれない。価値観の違いによって喧嘩することはあるが、価値観が違うために自分が傷つくことは少なく、何かを失うリスクが小さい。山本さんの場合のように、相手の条件を考える時、自分の幸せを壊さないことが一番の条件であると考えている人もいる。相手のことについて心配することも、実は自分の幸せを壊す恐れのあるリスクに対する行動になっているのかもしれない。

5-4. 性に対する心配

「青少年の性行動全国調査」から見ると、男女とも（とりわけ女子において）妊娠懸念を持つ者が増加している。同様に性感染症懸念についても大幅に増加し、性行動の「リスク化」が進んでいることが分かる。この部分では、まず対象者たちに妊娠懸念と性感染症懸念があるかどうかを確認し、この妊娠懸念と性感染症懸念は若年女性の性行動にどう影響するかを検討する。また、対象者たちの性に対する語りを整理しながら、新たな性に対するリスクを探究する。

5-4-1. 性に対する初印象

対象者たちに性に対して元々どんなイメージがあるか尋ねると、彼女たちは「怖い」あるいは「特に何もない」と答えた。性に対するイメージは性行動に影響するかもしれないため、ここで対象者たちの性に対する初印象を整理したい。

① マイナスイメージ

まず、性に対するマイナスのイメージがあった対象者たちの語りを分析する。高橋さんの場合は高校生の時に、大学になったら自然に性行為をするかもしれないと思っていた。しかし、その時の出会い系のアプリの自由な感じが怖いというイメージに繋がっていると語った。

筆者：・・・次は性に対するイメージが聞きたいんですけど、高橋さんはいままで性に対するイメージはどんな感じですか？

高橋：うーん。でも高校生ぐらいまでは全然、なんか見ることはあったけど、実際同年代としてる人って全然いないだろうし、大学になってもするのかなとか。うん、出会い系とかも当時からアプリが出始めましたけど、そういうのも怖くて入れなかったし、そんなになんか自由な感じも怖かったので、もうすることはないだろうなーって思っていました。

中村さんは現在は性交経験があるが、経験する前の性に対するイメージは周りの人から聞いたもので、そこには「怖い」、「痛い」のようなマイナスのイメージがあった。

筆者：・・・経験する前に、性に対するイメージはどんな感じですか？

中村：なんか高校生の時も周りに全然そういう人いなかったの、あんまり分からないなあって感じ。それほど知識がなかった。やっぱ心配するほど知識がなかったの、まあでもなんかすごい人づてに聞くと、何か痛いらしいと聞いたので、それは怖かったですね。痛いの嫌なので。

佐藤さんの場合、性格に対するイメージを聞いたところ、考えもなくすぐ「心配」と答えた。

筆者：初めてのときは、性に対するイメージはどんな感じですか？
佐藤：心配です。

渡辺さんと山本さんの場合は、性に対するイメージはよくなかった。しかし、実際に性行為を経験した後でそのイメージが変わった。

筆者：する前に性にどんなイメージがありましたか？
渡辺：怖いイメージでした。やっぱり怖いと思ってました（笑）。
筆者：全然したくない感じですか？
渡辺：したくないってか、しないだろうと思ってて、一生（笑）。恋人ができて、そういう雰囲気になったら怖いなって思いました。
筆者：恋人ができた後は？変わりましたか？
渡辺：あ、その後は怖くないです。

筆者：経験する前に、性のイメージはどんな感じでしたか？
山本：そうですね、初めは痛いと聞きました。ですが、経験した後、イメージは、変わりましたね・・・初めの方と、やっぱり痛いです。うまくいかなかったんです。痛すぎてそれで怖いです。なんか仲いい友達から聞くと、次はすごい気持ちいいよ、うまくいけば。
筆者：なるほど。今はいい感じになりましたね。
山本：今は、怖くなくなったという感じです。今の彼氏はすごい気を付けてくれる人ですので、痛いと言ったらちゃんと気を付けてくれて、痛いという感じより、むしろいい感じ。

田中さんは今まで交際経験・性交経験がなかった。彼女は性に対してネガティブなイメージ持っているが、好きな人ができたら、そうした行為に及ぶかもしれないと語る。

筆者：・・・はい。次は性に対するイメージを聞きたいんですけど、今性に対してどんなイメージがありますか？
田中：ああ、なるほど。イメージ。なんだろう。
筆者：怖い感じ？いい感じ？とか。
田中：怖いプラスかなって言ったらプラスですね。そのイメージが。好きな人とやったらやるのだらうと思います。

以上のように、性に対するマイナスの印象は「怖い」や「痛い」などの印象であった。そしてこのような印象があったのは、周りの人から聞くことが多かったからである。

② 普通というイメージ

次では、性に対する普通というイメージを持っている人の語りを整理していこう。小林さんは性に対する特別悪いイメージはなく、好きな人との行為であれば、何も問題はないと考えている。

筆者：その（初めての性行為）経験する前に、性に対するイメージはどんな感じでしたか？
小林：イメージ・・・それも本当に最初は結婚する人同士がするものだと思ってたから、なんかそんなポンポンしていいものなんだろうかみたいなのは（笑）、ちょっとありました。
筆者：なるほど、で今は？経験した後は何か変わりましたか？
小林：やり方によっては大丈夫。避妊とか、そういうなんか道具もあるから、まあそんななるべく好きな人とするなら、何でもいいんじゃないかなっていう（笑）。

鈴木さんは先述の田中さんと同様に今まで性交の経験がなかったが、田中さんと違い、そこに悪いイメージは持っていない。

筆者：・・・今、性に対するイメージはどんな感じですか？
鈴木：ええ。性ってあの、あれですよ。そんな気持ち悪いとか、そういう感情はなくて。
筆者：普通。
鈴木：普通、うん。でも見たらバーってなると思います（笑）。

以上の分析からみると、表9のように、性に対して普通だと思った人がいたが、大部の人にとって、性に対するイメージはマイナスの印象があった。9人の中に7人がいた。このマイナスの印象は自分の性行動に非常に強い影響がある。伊藤さんのように性に対するコンプレックスを持ち、交際し、実際に性行為をする際にもその点が非常に気になっていた。

表9. 性に対する初印象

対象者	マイナスのイメージ	普通なイメージ
伊藤さん	○	
山本さん	○	
中村さん	○	
高橋さん	○	
渡辺さん	○	
田中さん	○	
佐藤さん	○	
小林さん		○
鈴木さん		○

5-4-2. 性に対する心配

若年女性は性に対するマイナスのイメージが多いということは前節で分かった。では、彼女たちが性に対して持つ心配について分析していこう。性に対する心配は、対象者からの語りによると、「性に対する自信がない」という心配と「妊娠と性感染症懸念」2つが分けられる。

① 自信がない

伊藤さんは自分に自信がない性格で、関係が深まれば自然と性行為をするものと考えていたが、その際に相手に対して不安を感じていた。

筆者：・・・その性に自信がないことは自分の恋愛など何か影響がありましたか？
伊藤：もともと自分に自信がない性格ということもありますが、恋愛する中で、関係が深まればいずれは性行為もすることになるので、性行為をする際に相手に嫌われないだろうか、というような不安を感じることはありました。

鈴木さんは今まで交際経験が無かったが、伊藤さんと同じく自身の性的な魅力という点に自信が無いことについて以下のように語っている。

筆者：では性に対して、心配なことがありますか？
鈴木：心配なこと。確かに自分のことって考えると、なんか一気に怖くなりました。自分に対してそういう性的な目で、性的になれるのかどうか知りたい。自分にまったく魅力がないと思っているので、だから、それするくらいだったら、なんか、ほかの女のところ行ってもいいなあと思ってる自分がいます。

② 妊娠と性感染症懸念

また、先行研究でも触れたように、女性にとって性に対するリスクの一つは妊娠懸念と性感染症懸念である。また、未婚の大学生にとっては、男性より女性のライフコースにより大きな影響を持つ。この点については、調査対象者の何人かが言及していた。佐藤さんは性行為に強い心配があり、一番心配なのは子供ができてしまうことである。その心配は性行為の経験前に強かったが、この心配は現在も存在している。

筆者：・・・その心配はがどんな心配ですか？
佐藤：初めてなので、やっぱりわからないことが多いので、うん、どうすればいいかっていうのがまず一つだし、やっぱり子供できちゃうじゃないかっていう。
筆者：ああ、その心配もありますね。今は変わりましたか？前より
佐藤：そうですね。はじめての時も今も妊娠への心配は常にあると思います。

山本さんと小林さんは性行為をすることが、病気が感染することや妊娠に繋がる不安について以下のように語っている。

筆者：心配なことがありますか？

山本：そうですね、本当にお恥ずかしい話…保健ぐらいの知識はあって、こういう行為によって子供が生まれるんだなあみたいなの…すごい私生理が不順な人だったので、その性交なんかすごく痛くなったとか、最初のところ…体への影響がすごい心配…と思います。なんかしかも遅れたりとか、一回それで、二週間ぐらい遅れてくる。えっ？できた？って（笑）。検査しました。何もなかったです。

筆者：性に対して何か不安がありますか？

小林：ああ、病気がうつったりした声を聞くと、妊娠したらどうしようっていうのは、ちょっとは片隅にあります。いつも。

中村さんの場合は、今まで避妊に失敗したことが一度あり、それについてのトラウマがあった。

筆者：…今心配もないですか？

中村：あ、心配はそうですね。なんか避妊をしようとはしないんですけど、なんか失敗したことが一回があって、そう、それがちょっと怖いですね。トラウマっていうか。

筆者：ちょっと緊張しますね。

中村：そうそう、大丈夫かな？って

渡辺さんの場合は、妊娠への懸念があるため、避妊に工夫する。

筆者：…性に対する何か心配がありましたか？

渡辺：妊娠の心配はありました。でも絶対に避妊具はつけてましたとりあえず。

ここまでで、性に対する心配は2つあった。1つ目は、性への自信が無いために、性行動自体に対して起こる心配である。2つ目は妊娠や性感染症への不安である。結果では、2つ目の不安を持つ人がより多かった。心配がある7人の中に5人がこのような心配があった（表10）。妊娠や性感染症は確かに自分が傷つくことになるため、これもリスクの一つと言える。

表 10. 性に対する心配 (心配があった7人しか載れない)

対象者	自信がない	妊娠と性感染症懸念
伊藤さん	○	
鈴木さん	○	
佐藤さん		○
山本さん		○
小林さん		○
中村さん		○
渡辺さん		○

5-4-3. 小括

まず、性に対するイメージについて、表 11 のように 9 人中 7 人が性に対してマイナスのイメージを持っていた。このマイナスのイメージには「怖い」という回答をする人が一番多かった。そして 9 人中 2 人は普通のイメージを持っていた。そして、性に対する心配を 9 人中 7 人が持っており、一番多い心配は妊娠してしまうことであった。また、病気への心配や緊張などの不安もあった。「怖い」というイメージから、性行為自体をしたくないと思う人もいた。例えば渡辺さんは、現在は性交経験を持つに至ったが、元々性行為に対して怖いというイメージ持っており、一生することはないだろうと考えていた。実際、妊娠すること、または妊娠させることは、未婚または学業中の青少年にとっては、学業の中断もしくは中止や、中絶による心身の損傷をもたらす。また性感染症に感染することは、場合によって生命を危険にさらすことにもなりかねない。また、未婚の大学生にとって、妊娠や性感染症がもたらす自分への影響は、男性より女性の方が強い。調査の結果から見ると、多くの女性にとって、性に対する心配は確実に存在している。この性に対する心配は、現代女性の恋愛リスクの一つということが確認できる。

表 11. 性に対する初印象と性に対する心配

対象者	マイナスのイメージ	普通なイメージ	心配がある	性交経験
伊藤さん	○		○	○
山本さん	○		○	○
中村さん	○		○	○
高橋さん	○			○
渡辺さん	○		○	○
田中さん	○			
佐藤さん	○		○	○
小林さん		○	○	○
鈴木さん		○	○	

6. リスク意識に影響する要因

リスク意識は恋愛行動に伴って発生するが、リスク意識の強さは人によって違う。本論の目的ではないが、分析をしていくとともに、リスク意識に影響する要因について少し触った。

6-1. 年齢・交際経験とリスク意識との関係

伊藤さんは初めて恋人を作ったのが14歳の時であった。その時、恋愛に何か不安があったかを聞くと、周りの友達も大体その頃に付き合い始めていたため、不安は特になかったという。

筆者：はい。で、その時は初めての付き合いで、なんか、それまで経験がないので、付き合う前に何か心配がありましたか？心配なこと、不安なこととか。

伊藤：ああ、その時に不安だったこと？

筆者：はい。そうですね。

伊藤：いいや、特には、周りの友達も結構中学校ぐらいの時付き合い始めて、みんな（の恋愛の様子）を結構見たので、なんか、そういうもんかなあっていう感じ（笑）。

しかし、高校生になると、伊藤さんの恋愛への考え方が変わった。中学生の時は見た目が好きで付き合い始めたが、高校生の時はその人間性を見るようになった。つまり、伊藤さんの場合、中学生の時は恋愛する前に考えていたことが少なく、その分恋愛への心配や不安もなく、純粹にその人が好きかどうかだけを考えていた。高校生の時には、付き合う前に考えることが多くなり、リスク意識が強くなった。

筆者：で、高校生の時の付き合いと、中学校の時の付き合いは、何か違いがありましたか？

伊藤：えーと、中学生のときは、やっぱり初めての彼氏だったこともあって、なんか高校で付き合った人はちゃんとその人を見て好きだったんですけど、中学校の時はなんか、あの、声に恋してるみたいな感じで、なんか、その恋愛に、こう、ウキウキしてるのが好きみたいな感じはありましたね（笑）。だから中学校で付き合った人は、うーん、まあ悪い人じゃなかったんですけど、うーん、なんで付き合ったんだろうと思って（笑）、私こんな感じですかね。

筆者：いわゆる高校生のときは、付き合う前により多く考えましたね？

伊藤：ううん、なんかちゃんとその人を見て、なんか声が好きだからとかじゃなくて、そうですね、ちゃんとしていたっていうか。

渡辺さんは初めて恋人を作ったのが高校一年生の時であった。初めての恋愛は想像したものと同じであったかを尋ねたところ、想像するより現実的だったと語った。

筆者：その時の恋愛は、その時の想像中の恋愛と同じですか？

渡辺：うん、違いましたね。

筆者：どこが違いますか？

渡辺：えっと、想像した恋愛よりも、現実の恋愛の方が・・・

筆者：そんなにロマンチックな恋愛ではない？

渡辺：そうですね。なんか大変なこともいっぱいあるね、みたいな感じです。

そして、大学に入った渡辺さんは、逆に恋愛や恋人に期待しなくなってしまった。年齢が上がるにつれて期待が無くなったため、現在渡辺さんは恋人を作っていない。ここまでで、リスク意識が強くなることは年齢との関連があることが分かった。年齢が上がり、恋愛に関する経験を重ねることで相手の条件について考えることも多くなり、自身のその後の恋愛行動に影響している。渡辺さんの場合は、高校生の時は恋愛への憧れが強かったが、恋愛を経験し、実際の恋愛関係を見たことによって、大学では恋愛に期待しなくなってしまったという。

筆者：高校生の時に恋愛を経験して、そして、大学で付き合う前に、新しい期待がありましたか？

渡辺：あー、大学入ってからですか。期待か。恋人に対するですか？

筆者：そうです。

渡辺：特にないですね。変わらず。逆にあんま期待しなくなったかも。

筆者：へー、そうですか。で相手の条件も高校の時と同じですか？

渡辺：あー、条件。なんかその人の条件っていうか、その人いいなと思ったところは、先輩、後輩どっちも仲良かったっていうか、なんかこう友達以上に先輩も後輩も仲良くするんだみたいなところが良かったので、やっぱこういう関係、広い人の方が好きになりやすいとか、期待していることなのかなと思いました。後なんだろう、優しいっていうことは大前提ですね。でもなんか、その高校の時は多分一緒にいて楽しいっていうことだったんですけど、大学は一緒にいて楽しいっていうことはあんま期待してなかったという、期待外れだった、はい（笑）。

筆者：へー、なぜですか？

渡辺：期待してなかったっていうか、期待はしてたのかもしれないですけど、一緒にいるようになってから、あ、つまんない（笑）。期待してたけど、外れてしまったみたいな・・・高校の時の方が、恋愛の憧れみたいなのが強かったけど、しっかり恋愛してみて、なんかこんなものか（笑）。現実を見た。それはあります。

実際の恋愛関係を見たのは渡辺さんだけでなく、小林さんもそうである。小林さんは今まで彼氏が5人でき、現在も彼氏がいる。しかし、小林さんは前より、恋愛への期待が少なくなったようだ。

筆者：はい。今では恋愛のイメージは変わりましたか？

小林：なんか何て言うんだらう、前よりハードルが低くなったっていうか、すごい、もう恋愛ガチガチの理想ばかりだったときよりも、だいぶ現実を知ったっていう感じなので、時間と心に余裕があったら、ある人がすればいいんじゃないかなっていうぐらいの、人生において比重もちょっと低くなった。

渡辺さんと小林さんは、恋愛する前に恋愛への憧れが強かったが、恋愛を経験してみると、想像した楽しい恋愛と違い、大変なことも多く、自分も恋愛に興味を失ってしまったという。実際に恋人ができたことで、彼女たちは「現実を見た」。つまり、交際した人数が多ければ多いほど、現実的な（予想した恋愛と違う）恋愛が多くなり、恋愛に対しての意欲がなくなっていた。

6-2. 小括

インタビューの結果から見ると、多くの女性は恋愛する前に、その恋愛に対してドラマや漫画のようなイメージを持っていた。恋愛に憧れ、恋愛をロマンチックだと思う人が多かった。しかし、実際に恋人を作り、交際を経験した後、恋愛への考え方が変わった。想像よりも現実的だと感じる人が多くなった。考え方の変化は二つことと繋がっている。まず一つは年齢である。対象者たちの語りを見ると、多くの女性は小学校、中学校、高校でさえでも、恋愛に良いイメージを持っていた。その時の恋愛も純粋であり、「顔がいい」、「そっちから告白をもらった」、「相手の声が好き」など簡単な理由で、相手と付き合い始めた。しかし、年齢が上がるとともに、そのような簡単な理由で付き合うのではなく、相手の性格、二人の価値観、頼りにできるかなど、たくさんことを考えた上で、相手と付き合い始めた。つまり、リスク意識が若い時と比べ強くなった。リスク意識に影響するもう一つのは交際経験である。先に述べたように、初めて恋人ができる前は、多くの女性は恋愛に対して憧れを持っている。しかし、恋人ができ、想像した楽しい恋愛と違うことに気き、また何回も失敗を経験することで、恋愛への期待もなくなってしまった。彼女たちの言葉で言えば、「現実を見た」のである。つまり、交際経験が多ければ多いほど、恋愛の悪いところが見え、同じ過ちを繰り返さないように、付き合う前により多くのことを考えるようになったため、リスク意識も強くなった。表12のように、交際した人数が一番多く、初めての交際が14歳の伊藤さんは、恋愛に対するイメージが変わった。小林さんは17歳で初めて付き合い、その後5人と交際し、恋愛へのイメージも変わった。また、16歳で初めて交際を経験した渡辺さんも、今は恋愛に対して期待しなくなったという。インタビューの結果からみれば、恋愛リスクは恋愛を始める年齢や交際経験と繋がっている。

表 12. 恋愛に対する態度を影響する要因

対象者	交際した人数	初めて付き合う時	恋愛に対するイメージ
伊藤さん	6	14 歳	変わった
小林さん	5	17 歳	変わった
渡辺さん	3	16 歳	変わった
佐藤さん	3	15 歳	
山本さん	3	18 歳	
中村さん	2	12 歳	
高橋さん	1	19 歳	
田中さん	0		
鈴木さん	0		

しかし、調査対象においては、その全員が、年齢が上がって交際経験が多くなることで、恋愛リスクが強くなるわけではない。佐藤さんは今まで3人の恋人ができた。現在も恋人がいる。佐藤さんの場合は、初めての交際から現在まで恋愛への考えは変わらなかった。二人の距離や相手の性格への心配があったが、恋愛をやめようという意識はなかった。つまり、佐藤さんは恋愛へのリスク意識が弱いとも言える。

筆者：もし恋愛といえば、佐藤さんはまず何を思い浮かべますか？

佐藤：ああ、いい感じか悪い感じかって言えば、全然いい感じ。

(中略)

筆者：佐藤さんは恋愛に対する感じも良いし、なんか恋愛して良かったという感じがありますか？

佐藤：ありますね、したほうが良かったという考えがあります。

山本さんは現在恋人がいる。自分の幸せが中心で、現在、恋愛に良い感触を示している。

筆者：山本さんは、恋愛についてどう思いますか？恋愛のイメージはどんな感じですか？

山本：そうですね。イメージとしては、本当に抽象的なんですけど、自分の幸せが中心に、核があるんですよ、で、そこに何って言いますか、恋愛が核に入ってくることで、その核が壊れるか壊れないかみたいな感じなんです。もし壊れるようだったら恋愛をしたくないみたいな。

筆者：えー、そんな感じですか。今はいい感じですか？

山本：あ、今は(核)ちょうど入っています(笑)。

(中略)

筆者：今は恋愛して良かったと思いますか？

山本：とても良かったと思います(笑)

中村さんも現在恋人がいる。恋愛することは、自分の人間関係に影響があるが、自分の恋愛行動への影響は特にないようだ。

筆者：恋愛する前に、恋愛に対するイメージはどんな感じでしたか？

中村：イメージ…イメージって、なんか気持ち的な感じですか？

筆者：はい。

中村：楽しいっていうか、結構明るいイメージです。

(中略)

筆者：今恋愛に対するイメージはどんな感じですか？

中村：イメージは…うーん…なんか前はそのポジティブなことばかりだったんですけど、今割りとなんか縛られてたりとか、なんかどうしても友達と遊びに行く時間とかなくなっちゃうじゃないですか。だから、そういう面ではちょっとネガティブな面もあるけど、やっぱりでも楽しいイメージのままですね、全体としてみると。

高橋さんの場合は、今初めての恋人と付き合っている。それ以前は交際した経験も無かった。これまでのところ、恋愛に対するイメージは想像したものとそれほど変化はない。

筆者：恋愛と言ったら、まず何を思い浮かべますか？

高橋：恋愛っていう言葉を聞いた時っていうことですね。

筆者：そうそう。

高橋：えー、なんだろう。難しい(笑)。

筆者：ロマンチックな感じとか、いい感じですか？悪い感じですか？

高橋：うーん、まあ、いい、楽しかったりとか、なんか精神安定というか、心が落ち着いたりとか、するのはいいかなあって思いますね。はい。

(中略)

筆者：はい。高橋さんにとっては恋愛した良かったんですね。

高橋：はい。なんか最初の人でしたけど、なんか、いい人だったので、長く続きそうな感じですよ。はい。

以上の4人は恋愛に対するイメージが変わらなかった。つまり、恋愛を始める年齢と交際経験は恋愛リスクと繋がっているが、これは普遍的な現象であるとは言い難い。ここでは少しこの結果をさらに検証するため、より幅広いサンプルデータが必要である。また、対象者は大学生だけでなく、20代、30代の対象者も考えなければならない。

7. おわりに

本論文では、日本における若者の恋愛離れを背景に、若年女性の恋愛リスクについて研究を行った。先行研究でも触れたように、高橋（2010、2013）によれば、若者の性が「欲望の時代からリスクの時代」へ向かったことがあるという。これは若者の性行動の不活発化が生じた背景である。つまり、現代の若者にとって、恋愛から何を得られるかより、恋愛で何を失うかを重視するようになっている。これが「リスク化」と呼ばれる現象である。このリスク意識は性行動の不活発化を引き起こす原因の一つと見られる。また、M・ホワイトの論文（1993）や「第八回世界青少年意識調査」（2009）で述べられているように、日本の若者、特に女性にとっては、恋愛関係の中で一番重要なのは情熱があるかどうかということではなく、安定が得られるかどうかということである。安定的、永続的な恋愛関係を求め、性欲より、自分の幸せを優先する。つまり、恋愛したら何を得られるかより、何を失うかを重視するようになっている。そのため、恋愛関係を始める前に、自分の幸せを脅かす要素を排除する。その幸せを脅かす要素は「恋愛リスク」であった。

恋愛リスクについて、まず、1つ目を明らかにしたのは「失敗する」というリスクである。これは恋人を作らない理由についての質問に対する回答から見られた。恋人を作らない理由について、調査対象者の3分の2は「自信がない」と回答している。安定的、永続的な恋愛関係を持つ自信がないため、恋愛関係を始めない。この「自信がない」原因は「見た目」、「自身の性格」、「他人との比較」、「相手の気持ち」の4つがある。また、インタビューの結果から見ると、その自信がなければいけほど、失敗への心配が強く、自分の恋愛行動を躊躇する傾向がある。

そして2つ目は「悪い影響」というリスクである。本論文では、「悪い影響」を3つに分類した。一番強い影響は人間関係への影響であり、次は時間と気分への影響である。これは多くの対象者が経験した結果である。しかし、交際経験がなかった対象者も、恋愛によって、多かれ少なかれ自分への悪い影響という心配を持っていた。

3つ目は「相手の条件」というリスクである。交際することは二人で行うことであり、一人ではできない。そのため、交際する前に、自分のことだけではなく、相手のことも考えなければならない。つまり、それは恋人の条件として語られる。若年女性にとって一番重要なのは、相手に依存できるかどうかということ、そして相手の性格である。ここでいう依存とは、お金などの物質的な依存ではなく、「物理的近接」（側にいること）と「心理的近接」（距離があっても連絡が取られること）、などである。これは現代日本における若者の安定性を求める恋愛観と合致する。つまり、今日の女性たちは、20年、30年前と異なり、相手の職業やお金をあまり重視しなくなり、自分の幸せを優先し、安定的な恋愛関係を維持できる相手を選ぶ。これについて、本論文で論じていなかったが、恋人の条件が変わったことは、女性の社会進出と繋がっているかもしれないと考えている。第16回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）によると、女性は相手の「家事・育児の能力や姿勢」を重視する人が増えた（1997年調査の43.6%から2021年調査の70.2%）。ここで「家事・育児の能力や姿勢」という項目は、大学生としての対象者の場合から考えれば、本論で言う「依存できる」という条件と同じと言えるだろう。そして「性格が悪い」という問題である。性格が良くない人は自分への影響が想定しやすい。例えば怒りやすい人は、暴力を振るうかもしれない。性格が悪い、あるいは二人の性格が合わなければ、喧嘩を頻繁にする可能性もある。これは直接的に自分を傷つけることに繋がる。女性はこのようなことが

起こらないように、相手の性格を重視している。「自分のことを好きになってくれない」という心配について、恋人が自分のことを好きではなくなり、或いは他の人を好きになってしまうのは、誰にとっても嫌なことである。具体的には、渡辺さんのように「浮気される心配」、小林さんのように「喧嘩ばかりで嫌われてしまう」、伊藤さんのように「性行為の際に自分の身体的なコンプレックスによって、嫌われるかもしれない」などの心配があった。このような心配は、交際する過程の中で生じている。最後は「価値観の不一致」という問題である。価値観が合わないと心配していた対象者は9人中2人とどまった。こうした不安が調査対象者の中に少なかった理由について、価値観が合わなくても、自分への直接的な悪影響が弱いということが考えられる。価値観の違いによって、喧嘩することはあるが、価値観が違うため自分が傷つくことは少なく、何かを失うリスクが小さい。山本さんのように、女性は相手の条件を考える時、自分の幸せを壊さないことを一番の条件と考える人もいる。相手のことを心配することも、実は自分の幸せを壊さないための、リスクに対する行動になっているのかもしれない。

最後は「性に対する心配」である。恋愛研究を行う際に、性行動について無視することはできない。インタビューの結果から見ると、調査対象者の3分の2以上は性行為に悪いイメージがあり、性行為に対する心配があった。その中で一番多かったのは妊娠への心配である。また、性感染症への心配もあった。片瀬(2016)によれば、女子は、性感染症懸念が強いほど性交経験率が低下する。また、「第8回青少年の性行動全国調査」からみれば、妊娠懸念のみが、男子より女子において性行動の不活発さをもたらしていた。性行為に対するイメージや心配は確かに自身の性行動に影響しているようだ。論文の結果から、3分の2以上の対象者たちは性行為に悪いイメージがあり、性行為に対する心配があったことが分かった。ここからは、日本の性教育が充実していないことも指摘できるだろう。これについて、橋本ら(2011)は、日本の性教育について次の2つ問題があると述べている。1つ目は性教育に関する時間数が少ないことである。2つ目は、子どもの性や性教育に対する反応と親の学校への期待とをどのように見るかという問題である。子どもたちに性についての正しい認識を持たせるためには、まだ長い道のりがある。

分析が進むにつれて、リスク意識と関連する要因も見られようになっていった。それは年齢と交際経験である。多くの女性は初めての交際の前に、恋愛に対して憧れを持ち、その恋愛に対するイメージはドラマのようであった。しかし、年齢が上がり、より多くのことを考えるようになり、リスク意識も強くなっていた。また、実際に何人かの恋人を作り、失敗を重ねるにつれ、恋愛への期待もなくなってしまった。しかし、これは本論文における対象者たちの結果であり、一般論としては汎用性に欠けるかもしれない。この結果をさらに検証するため、もっとサンプルデータが必要である。また、対象者は大学生だけではなく、20代、30代、また、職種別の対象者も考えなければならない。

このように、本研究では、日本における若年女性の恋愛リスクの内容を追究した。若年女性の恋愛に対する意欲が低下することについて、質的に検討し、日本の晩婚化・未婚化の要因を仮説を導出したことに、本研究の意義があると考えている。

参考文献

- 赤川学, 1999, 『セクシュアリティの歴史社会学』, 頸草書房
- Beck, Ulrich, 1986, Riskogesellschaft, suhrkamp Verlag. =1998 東廉・伊藤美登里
訳「危険社会」法政大学出版局
- 千田有紀, 2011, 『日本型近代家族—どこから来てどこへ行くか』, 頸草書房
- 深澤真紀, 2007, 『平成男子図鑑 リスペクト男子としらふ男子』, 日経 BP 社
- 藤沢伸介, 2004, 「女子が恋愛過程で遭遇する蛙化現象」, 日本心理学会大会発表論文
集
- 羽瀨一代, 2006, 「青年の恋愛アノミー」岩田考・羽瀨一代・菊池祐生・苦米地伸編『若
者たちのコミュニケーション・サバイバル』, 恒星社厚生閣
- , 2012, 「現代日本の若者の恋愛とその機能」, 小谷敏・土井隆義・芳賀学・
浅野知彦編『若者の現在—文化』, 株式会社日本図書センター
- , 2022, 「マッチングアプリ利用の現在：アーリーアダプタの属性とその傾
向」, 『メディア研究 102 号特集』, 日本メディア学会
- 橋本紀子, 2011, 「日本の中学校における性教育の現状と課題」, 「教育とジェンダー」
研究
- 原口伶泉, 竹鼻ゆかり, 2019, 「マッチングサービス・アプリの大学生の利用実態と影
響要因」, 東京学芸大学紀要, 芸術・スポーツ科学系
- 林雄亮, 2013, 「青少年の性行動の低年齢化・分極化と性に対する新たな態度」日本性
教育協会編『「若者の性」白書—第 7 回青少年の性行動全国調査報告』, 小学館
- , 2018, 『青少年の性行動はどう変わってきたか—全国調査に見る 40 年間—』,
ミネルヴァ書房
- 市野澤潤平ほか, 2014, 『リスクの人類学 不確実な世界を生きる』, 世界思想社教学社
- 井上俊, 1973, 『死にがいの喪失』, 筑摩書房
- 石川由香里, 2007, 「情報源の違いがもたらす性意識のジェンダー差—〈純粋な恋愛〉
志向をめぐる」日本性教育協会編『「若者の性」白書：第 6 回青少年の性行動
全国調査報告』, 小学館
- 片瀬一男, 2007, 「青少年の生活環境と性行動の変容—生活構造の多チャンネル化のな
かで」日本性教育協会編『「若年の性」白書—第 6 回青少年の性行動全国調査報
告』, 小学館
- , 2016, 「「リスク」としての性行動・「危険」としての性行動—避妊をめぐ
る男女の非対称性—」, 東北学院大学教養学部論集
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2022, 『現代日本の結婚と出産—第 16 回出生動向
基本調査』.
- 小松丈晃, 2003, 『リスク論のルーマン』, 頸草書房
- 森岡正博, 2009, 『最後の恋は草食系男子が持ってくる』, マガジンハウス
- , 2011, 「草食系男子」の現象学的考察 『The Review of LifeStudies』
- 永田夏来, 2003, 「愛情が先か、子どもが先か—結婚の原理とその論理構成」早稲田大
学社会学会『社会学年誌』
- , 2013, 「青少年にみるカップル関係のイニシアチブと規範意識」『「若者の
性」白書 第 7 回青少年の性行動全国調査報告』, 小学館
- 内閣府, 2014, 『平成 26 年度「結婚・家族形成に関する意識調査」報告書』
- , 2009, 「第八回世界青少年意識調査」

- 中西祐子, 2017, 「近代家族とジェンダー」 『社会学の力—最重要概念・命題集』, 有斐閣
- 西村雄郎, 1992, 「現代青年の『恋愛』・『結婚』観—『金沢』調査の結果から」, 『鹿兒島女子大学紀要』
- 大越愛子, 2001, 「恋愛三位一体幻想」 『現代文化スタディーズ』
- 大森美佐, 2014, 「若者たちにとって「恋愛」とは何か—フォーカス・グループディスカッションによる分析から—」, 家族研究年報 39
- , 2022, 『現代日本の若者はいかに「恋愛」しているのか』, 晃洋書房
- 佐伯順子, 1998, 『「色」と「愛」の比較文化史』, 岩波書店
- 総理府青少年対策本部編, 1972, 『青少年の性意識』, 大蔵省印刷局
- , 2018, 「21世紀における親密性の変容—「リスク」としての性行動」, 『若年の性』白書—第7回青少年の性行動全国調査報告』, ミネルヴァ書房
- 菅野聡美, 2001, 『消費される恋愛論 大正知識人と性』, 青弓社
- 高橋征仁, 2010, 「コミュニケーション・メディアと若者の性」, 第12回性科学セミナー
- , 2013, 「欲望の時代からリスクの時代へ—性の自己決定をめぐるパラドクス」 日本性教育協会編, 2011, 「若者の性」白書 第7回青少年の性行動全国調査報告』, 小学館
- 棚沢直子・草野いづみ, 1995, 『フランスには、なぜ恋愛スキャンダルがないのか?』はまの出版
- 谷本奈恵, 2008, 『恋愛の社会学「遊び」とロマンティック・ラブの変容』, 青弓社
- 谷本奈穂・渡邊大輔, 2016, 「ロマンティック・ラブ・イデオロギー再考—恋愛研究の視点から—」
- 上野千鶴子, 1992, 「ロマンティックラブ・イデオロギーの解体」
- 山田昌弘, 1991, 「現代大学生の恋愛意識—『恋愛』概念の主観的定義をめぐって」, 『昭和大学教養部紀要』
- , 1994, 『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドクス』, 新耀社
- , 2005, 『迷走する家族—戦後家族モデルの形成と解体』, 有斐閣
- , 2007, 『少子社会日本—もうひとつの格差のゆくえ』, 岩波書店
- , 2009, 『なぜ若者は保守化するのか—反転する現実と願望』, 東洋経済新報社
- , 2010, 『婚活現象の社会学—日本の配偶者選択のいま』, 東洋経済新報社
- 山田昌弘・開内文乃, 2012, 『絶食系男子となでしこ姫—国際結婚の現在・過去・未来』, 東洋経済新報社
- 柳父章, 1982, 『翻訳語成立事情』, 岩波書店